ちゃぶ台返し

〈登場人物〉

高木初江（主婦、スーパーのレジ係）
高木三郎（夫、会社員）
高木麗子（長女、フリーター）
高木剛史（長男、大学生）
講師（カルチャースクールの講師）
助手（同じく助手）
生徒１（主婦）
生徒２（主婦）
佐藤敏江（スーパーの総菜係）
塩田瑛子（同じく総菜係）
緒方裕子（福岡天神のキャバクラ嬢）

１

冷蔵庫のモーター音、低く唸るように。がさごそ音をたてながら包装を解いている高木初江（五五歳）。中から出てきたのは直径八十センチの円形、脚の高さ三十センチほどの木製の卓袱台。卓袱台を舞台中央に置くと、初江は傍らに座り、しばらく眺めている。モーター音、徐々に大きくなる。初江、立ち上がり、卓袱台の頑丈さを確かめると、その上にそっと乗る。微笑む。モーター音、止まる。暗転。

２

明りが入ると、そこは高木家のリビング・ダイニング。

下手には巨大な冷蔵庫が備えつけられている。冷蔵庫というよりまるで仏壇。
舞台中央にはあの卓袱台。
腕時計のアラーム音。
高木剛史（二二歳）がリビングのソファに腰掛け、サプリメントらしきものをコップの水と一緒に飲んでいる。
姉の高木麗子（二五歳）が通り過ぎようとして、卓袱台に足をぶつける。

麗子　……痛っ、何よ！
剛史　（水を飲みながら）姉貴、今日は仕事ないの？
麗子　ないわよ。
剛史　優雅だね、フリーターさんは。
麗子　これ、あんたの？
剛史　何が？
麗子　（卓袱台を指し）これ。
剛史　知らないよ……（包装紙の宛名を見て）母さんのだ。
麗子　ずいぶん時代がかってるけど、母さん、アンティークの趣味なんてあったの？花でも置くのかな。
剛史　何言ってんだ。
麗子　え？
剛史　知らないの？
麗子　……。
剛史　卓袱台じゃないか、これ。
麗子　ちゃぶ、だい？
剛史　卓袱台……ほんとに知らないの？
麗子　知らないわよ。
剛史　じゃあ、巨人の星は？
麗子　野球漫画でしょ。少年マガジンだっけ。熱血スポ根ものの。感極まると、やたら大げさにボロボロ泣くやつ。星、何とかいうのが主人公で……。
剛史　星飛雄馬。
麗子　そう、それ。
剛史　飛雄馬の親父、星一徹っていうんだけど、これが元巨人軍の選手で、すげえスパ

ルタ親父でさ。息子を猛烈に鍛えまくるんだよ。大リーグボール養成ギブスとかいって、上半身にエクスパンダーみたいなのをはめさせて。それで飛雄馬の投げる大リーグボールなんだけど、1号から3号までありってさ。1号はバットに当てて凡打にするもの、2号は消える魔球で、3号はこう、バットをよけて……。

麗子　（さえぎって）ちゃぶだいは？

剛史　え？

麗子　ちゃぶだいはどこいったの？

剛史　飛雄馬が反抗したときに、親父がひっくり返したんだ。

麗子　何を？

剛史　だから、こいつを。

麗子　これを？

剛史　卓袱台返し。

麗子　ちゃぶだい、がえし？

剛史　必殺卓袱台返し（笑）。

麗子　ひっくり返すとどうなるの？

剛史　決まってるだろ。お碗やお皿が吹っ飛ぶ。明子ねえちゃんが作ってくれた夕食が台無しになる。

麗子　あきこねえちゃん？

剛史　飛雄馬の姉さんだよ。やさしくて、美しくて、貧乏に耐えながら弟を陰で支える可憐で健気な……。

麗子　（不快そうに）どうしてそんなことするの？　その、頑固一徹親父は。

剛史　怒りにまかせて、かな。

麗子　何を怒ってるの？

剛史　忘れちゃったよ。とにかく怒って、卓袱台をひっくり返したんだ。しょっちゅうそんな場面があったわけじゃないけど、なぜか印象が強い。だから、卓袱台といえば巨人の星。

麗子　つまり、これは食卓ってこと？

剛史　日本の常識だぜ。

麗子　あんた、えらそうにいうけど、こんなの使ったことあるの？

剛史　ないよ。

麗子　ないんじゃないの。

剛史　なくたってわかるさ。こいつを囲んで飯を食う。それだけのことだ。

麗子　囲むの？

剛史　座って囲むんだよ。昔の家だから畳の上に置いて、正座して。

麗子　誰が？

剛史　家族に決まってるだろ。

麗子　家族が？

剛史　家族だよ……まあ、うちの場合なら、父さんがここにいて（指し示す）、母さんがここ。姉貴がここで、俺がここか。

麗子　待って。どうして私がそこなの？　どうして父さんと向かい合うわけ？　父さんの顔、見ながら食事するわけ？

剛史（面倒くさそうに）なら、こっちでもいいよ。

麗子　ならって、そんなにいい加減なの？　ちゃんと各々の場所が決まってるんじゃないの？

剛史　決まってなんていないよ。まあ、親父の場所は決まってるかもしれないが。

麗子　父さんだけ？

剛史　昔は家長っていって、すごく威張ってたわけ。だから座るところも……。

麗子　どうして威張るの？

剛史（苛立って）知らないよ、そんなこと。姉貴が嫌なら、（その隣を指し）そっちに座ればいいじゃないか。

麗子　でもそうなると、父さんが隣にくるってことでしょ。

剛史　しょうがないだろ。四人家族なんだから。パターンは何通りもない。全部で……（少し考えて）4……6通りかな。

麗子　こんな狭いところで食事するの？　息がつまるわ。私、無理。絶対に無理。それに正座して食事なんて。

剛史　胡坐かけば。

麗子　胡坐なんて……。

剛史　食べにくいか。
麗子　顔をつきあわせて、何話すのよ。
剛史　しゃべらないんだよ。
麗子　黙って、もくもくと食べるの？
剛史　食べることに専念するの、昔の人は。
麗子　話がしたいってわけじゃない。ただ、こんなに接近してたら、どんなくだらない話題でもいいから持ち出さなきゃと思わない？　だってこの近さよ。異常だわ。こんなところで黙って、それも正座して……それじゃどんなご馳走があったって美味しくなんてない。苦痛だわ。ていうか拷問よ。巨人の星のスパルタ親父じゃなくたって、ひっくり返したくなるわ。
剛史　（溜息）……。
麗子　母さん、何でこんなもの買ったんだろ。
剛史　あれの代わりかな。
麗子　あれって？
剛史　あれ（ダイニングにあるテーブルを指す）。
麗子　あれの？　どうして？
剛史　脚がぐらついてる。
麗子　嘘。
剛史　四本とも。

麗子、テーブルの脚にさわってみる。

麗子　危ないじゃない。
剛史　かなり前からだぜ。
麗子　……。
剛史　ぐらぐらしてた。
麗子　あんた、工学部でしょ。なおせないの？
剛史　俺は大工さんじゃないし。こうなると修理したって駄目だよ。
麗子　だったら、新しいの買えばいいじゃない。（卓袱台を指し）こんなんじゃなくて、ちゃんとしたやつを。
剛史　知らないよ、それにさ。
麗子　それに何よ。
剛史　要らないんじゃない。最近、みんな揃

って飯食ったりしないし。

麗子　……母さん、どういうつもりなの？

剛史　懐かしかったんだろ。子どもの頃、使ってたんじゃないの。

麗子　長野のじいちゃんの家にあった？

剛史　あったような気もするが……いいじゃないか、何だって。

麗子　何、企んでるのかしら。

剛史　よせよ、そういう言い方。

麗子　変よ、母さん、この頃特に。

剛史　……ああ、変かもな。でもそれは。

麗子　私のせいだって言いたいの？

剛史　わけわかんない我儘な病気でさ。

麗子　あんたに何がわかるのよ。

剛史　わかんねえよ。「何よりも家族の理解と協力が大切です」あのやったら化粧の濃いすかした女医がいうからそうしてきたけど。じゃなきゃ治らないって仰るから……まるで腫れ物じゃないか。なのに姉貴、またぶり返してんじゃないの？　吐いてるんだろ。バズーカ砲みたいなロールケーキ、何本も食ってさ。吐いてるんだろ。ごまかそうたって駄目だ。くさいもんな。トイレがくさい！　やったらくさい！

麗子　あんたにはわからない。

剛史　ああ、わかりません。俺には全然わからんですよ。でもさ、母さんに……。

麗子　うるさいっ！　母さんなんて関係ないわよ！

剛史　関係ないって、あれだけ世話かけといてなんだよ！　母さん、あっちの病院、こっちの病院ってかけずりまわって。何冊も本、買ってさ。講演会や親の会にも顔を出して。必死だったじゃないか！

麗子　……あんた、人のこと言えるの。じゃあ聞くけど、あんたのあれは何だったの？　あのときのあんたは、腫れ物じゃなかったの？　母さん、たいへんだったってことじゃ、同じじゃないの？

剛史　……十年も前の。

麗子　そっちは時効だっていうの？　ずいぶん勝手ね。言っとくけど、時効なんてないわよ。少なくも母さんの中では。

剛史　……。

麗子　あんた、今日、大学休みなの？

剛史　ああ。

麗子　……巨人の星なんだけど。

剛史　え？

麗子　母親はいないの？　主人公の野球少年ときれいなお姉さんと卓袱台ひっくり返す親父がいて、母親は？

剛史　飛雄馬の母親？

麗子　いないの？

剛史　どうしたんだっけ。覚えてない。小さい頃、亡くなったのかな。

麗子　そうでなきゃ、ひっくり返さないわね、卓袱台。

剛史　たぶん。

麗子　……母さん、遅いの？

剛史　聞いてないの？　木曜はパートの帰りに寄るところがあるから遅くなるって。

麗子　どこへ？

剛史　カルチャーセンター。駅前のパルコの五階の。

麗子　カルチャーセンター……ああ、フラワーアレンジメントか。そういえばやりたいって。

剛史　いや、確かペーパーなんとか……。

暗転。

3

カルチャーセンター。

黒板を前に立つ講師（五十代の男）その傍らに助手（三十代の男）。

長机に座っている生徒１、２（共に中年の主婦）と高木初江。

講師　子のたまわく。

助手　先生はおっしゃった。

講師　吾十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。

助手　私は十五歳で学問を志し、三十歳でそれを確立しました。四十で迷うことなく。

講師　五十にして天命を知る。六十にして耳に順う。七十にして心の欲する所に従って、矩をこえず。

助手　五十になって天命をわきまえ、六十になって人の言葉が素直に聞かれるようになりました。そして七十になって思うままにふるまって、道をはずれないようになりました。

講師　（生徒１に）あなたはおいくつ？

生徒１　四十二です。

講師　迷っていませんか？

生徒１　迷ってばかりです。

講師　さもありなん。（生徒２に）あなたは？

生徒２　五十一です。

講師　天命を知りましたか？

生徒２　天命って寿命のこと？

講師　似たようなものです。

生徒２　占いで見てもらったら八十五まで生きるそうです。

講師　（無視して初江に）そちらさんは？

初江　五十五歳になります。

講師　四捨五入すれば六十ですね。では人の言葉が素直に聞かれますね。

初江　私、カルチャースクール、初めてなんです。お教室とか習い事も。何度か参加してもいいないって誘われたし、私も参加してもいいかなって思ったこともあったんですが、いつもふみきれなくて。

講師　いいじゃないですか。今、その時がきたのです。人の言葉が素直に聞かれる年齢になったのです。あなたがそれを吸収するのに一番いい時期になったのです。グッドタイミングです。シンキングポット、思う壺です。飛んで火に入る夏の虫です。

助手　成長を期待します。

生徒１　あの、このお教室、創作料理の講座なんですよね。

助手　その通りです。

生徒２　ええっ、私、ペーパークラフトの講座だとばっかり。

助手　その通りです。

生徒１　料理じゃないんですか？

助手　料理です。

生徒２　ペーパークラフトでしょ？

助手　ペーパークラフトです。

初江　私は……お料理かと。

生徒１　そうですよね。

初江　でも、ペーパークラフトにも興味あります。折り紙とか好きですし。

生徒２　そうですよね。

初江　どっちもできそうな気がして。

助手　どっちもできます。

生徒１　どっちもって一緒にやるんですか？

生徒２　それとも交互に？

助手　一緒です。同時に。

生徒１　お料理とペーパークラフトを。

生徒２　一緒に？

助手　同時に。

生徒１　そんなことって……。

生徒２　確か案内パンフの講座名には、ペーパークラフトって書いてあったわ。

助手　正しくは、ペーパークラウです。

生徒２　ペーパークラウ？

講師　ペーパー、クラウ。

生徒１　講座の説明欄に斬新な創作料理を超越した創造料理とあったから。

助手　パンフレットに一箇所罠が、もとい校正ミスがありました。創造ではなく（黒板に創造と書き×をつける）想像ですね（想像と書く）。

生徒１　え？

助手　クリエーションでなくイマジネーションと申しあげているのです。

講師　いや、クリエーションでも一向にかま

いませんよ。（初江に）ところであなた、主婦歴はいかほど？

初江　二十四で結婚しましたから、三十一年になります。

講師　では料理の腕も相当なものだ。

初江　たいしたことありません。自己流でつくり続けてきました。

講師　ご家族のために？

初江　ええ……。

講師　ご家族は何人？

初江　四人です。主人と娘と息子。

生徒２　あの、これやっぱりペーパークラフトの講座じゃないんですね。

助手　ペーパークラフトですよ。

生徒１　料理のお教室でしょ。

助手　もちろん。

生徒２　どっちなんですか？

助手　だから、どっちも。

生徒２　どっちもって……。

初江　あの、今の講義ですが。

講師　子のたまわく。

助手　論語です。

講師　孔子です。

助手　この方は講師です。

初江　お料理とか紙細工だけでなく、生き方というか、人生についても教えていただけるような気がして。

助手　その通り。

講師　正解。すなわち本講座は、料理教室にして、ペーパークラフトにして、人生の根本原理を学ぶ講座です。哲学です。

生徒１　哲学？

助手　哲学ですが、鉄学じゃありません。アイアン、（黒板に鉄と書く）鉄の学問じゃない。そんなに固くては歯が立たない。

講師　子のたまわく。

助手　先生はおっしゃった。

講師　朝に道を聞きては、夕べに死すとも可なり。

助手　その朝、道が聞けたら、その晩に死ん

でもいい。

生徒２　道って？

助手　真実です。真理です。

講師　難しく考えなくていいです。朝食を十分いただいたら、夕食は少なめでもいいといった程度の喩えです。

初江　朝食はやっぱり大事なんですね。でも私には哲学は難しそう。

講師　大丈夫。ほんとの話、哲学はほんの味つけ程度、ドレッシングです。

生徒１　あの、どうしてもわからないんですが、この講座は結局、何ですか？

生徒２　ペーパークラフトで、創作料理で。

生徒１　おまけに哲学ですか？

講師　画期的でしょ。

助手　センターへの申し込み人数、すごかったんですよ。定員三人のところへ、三百倍もの応募ありけり。

生徒１　そんなに？　ほんと？

助手　はい。

生徒２　じゃあ、私たち選ばれたってこと？

助手　はい。

生徒１　選考基準は？

助手　主に羊がらみです。

初江　羊？

助手　はい。まず干支が未年。

生徒１、２、頷く。

助手　星座は山羊座。

生徒１、２、頷く。

助手　名前に羊が入ってる。

生徒１　洋子です。

講師　（黒板に洋と書く）サンズイに羊。サンズイは水ですから、すなわち溺れた羊。

生徒２　祥子です。

助手　（黒板に祥と書く）衣偏に羊。すなわち服をきた羊。おそらくウールだと。

生徒2　衣偏じゃないです。示偏ですよ。

講師　カミのお示しがありますように。

初江　私は巳年ですし、さそり座です。名前に羊、ありませんが。

助手　全然？　どこにも？

初江　はい。初江の初は衣編ですが。

助手　どうしたんでしょうね。

講師　たぶん、特別に選ばれた人なんでしょう。幸運な人です。カミの子です。

助手　子のたまわく。

講師　子のたまわく……鰯の頭、食う？　そう聞こえたら幻聴。それは鰯でなく和紙です。楮や三椏を何してつくった、あの和紙です。日本の伝統の技です。和紙の魂（たま）、食う？　これが正解。魂（たま）はたましい、霊です。和紙に乗り移った魂を食う。これが本講座の趣旨。ペーパークラウ、鉄学でなく、紙学です！

暗転。

4

スーパー、ヤオコーの休憩室。テーブルに長椅子。

三人のパートが休憩している。

塩田瑛子と佐藤敏江はバックヤードで総菜づくりを担当。共に五十代の主婦。

二人は白い作業着に長靴姿。

レジ係の高木初江はスーパーのロゴの入った紺色の制服を身につけている。

塩田　（菓子を食べながら）肩、凝るわあ。

佐藤　私も。

塩田　でも学校で給食のおばさんやってたときよりずっと楽ちん。あっちは、これだから（大きくかき回す仕草）。

佐藤　大きいもんね、鍋でも釜でも。

塩田　ガリバーの食事を作ってる小人。鍋の

中かきまわすのだってオールで漕いでるようなものよ。草津の湯もみ、知らない？あんな感じ。

佐藤　大げさね。私が前にいた弁当屋なんて揚げ物ばっかりでしょ。熱いし、油の臭いがつくし、顔中、てっかてか。

塩田　どうしてお弁当って、揚げ物が多いのかしらね。

佐藤　見栄えがいいからじゃない。カロリーあるし。弁当って温かくてボリュームがあることが大事なの。栄養のバランスなんか二の次三の次。ビタミンだ、ミネラルだのは他の食事で摂ってくださいって。だから、油ギトギトがいいのよ。

塩田　その点、給食はたいへん。栄養士が少ない予算の中で一生懸命考えるんだけどさ。最近は親がうるさいの。メニューにクレームつけるだけじゃなく、生産地がどうなってるとか。遺伝子操作の作物は使ってないかとか。そのくせ給食費払ってない連中もいるのよ。そりゃ、お金がふんだんにあれば何でもできるわよ。

佐藤　（初江に）高木さん、どうしたの？

初江　え？

佐藤　最近元気ないね。食欲ないの？　食べないと元気でないよ。

塩田　高木さん、この間からずっとこんな感じなの。記録を達成してから。

佐藤　記録？

塩田　通算、三万三千三百三十三食。

佐藤　それって、もしかして。

塩田　主婦業三十一年の彼女が、これまでにつくった食事の数。

佐藤　一年で千食強か。私はたぶんその半分くらいかなあ。手抜き主婦だから。

初江　働いてれば無理よ。

塩田　あんただって働いてるじゃない。

初江　私なんてここのパート始めてやっと五年だし。勤務時間も短いし。

佐藤　それ、子供のお弁当も入れての数？

初江　ええ、まあ……。

塩田　新婚当時の愛妻弁当。子供が生れて離乳食。幼稚園はお弁当。小学校は給食があるけれど、私立の中学にでも入ればまたお弁当。朝は戦場よ。めんどうがる子供たちに無理やり食べさせながらの弁当作り。旦那はごはんがいいといい、子供はパンがいいといい……。

佐藤　（初江に）お姑さん、いなかったんでしょ。姑がいたらまたたいへんよ。ごはんが固いとかやわらかいとかうるさいし。

塩田　姑でなくたってうるさいこというのはいるわよ。うちの亭主なんて、やれ塩っぱいの甘いのってケチつけるの。それで自分はいっぱしの食通のつもりなの。交際費使って料理屋で飲み食いができた世代でしょ。会社の金を使ったグルメのくせに銀座の天一の天婦羅はどうだ、浅草の今半のすき焼きはどうのって。

佐藤　そんなのと比べられてもね。

塩田　だから言ってやったわよ。一流店の味を真似させたいのなら、つれていけって。通いつめてプロの味を学ぶわよ。

佐藤　弁当屋のパートの頃は、うちの子供たち、店のおかずばっかりだった。ケチってるわけじゃなくてさ、もったいないじゃない、捨てるの。

塩田　学校もね、残飯多いのよ。昔は、全部食べるまで駄目とかいって、先生がうるさかったじゃない。最近、違うの。無理強いはしないの。

佐藤　親がうるさいんでしょ。

塩田　うちの子は給食が嫌だから学校へ行きたくないって言ってるんです、だって。じゃあ来るなっていうのよ。

初江　……あの。

塩田　何？

初江　そういう子の気持ちもわからないでもないかなって。

塩田　そう？　甘えだと思うけど。

初江　きっと、いろんな事情が……。

佐藤　小学校も弁当にすればいいのに。

塩田　そうなりゃそうなったで、また文句が出るのよ……それにしても、高木さんみたいにきちんきちんと家族のために食事を作り続けた人は珍しいわ。

佐藤　三万三千か……でもよく数えたわね。普通、数える？　そういうの。

塩田　日記。この人、日記つけてたんだって。日記というより、この人のは毎日の食事の記録。

初江　……一九九八年五月七日。晴れ。埼玉の叔母から電話あり。叔父の三回忌の連絡。朝食、豆腐と葱の味噌汁、納豆、海苔、目玉焼き、ほうれん草のおひたし、胡瓜の糠漬。昼食、剛史は給食、父さんと麗子はお弁当。夕食、肉じゃが。牛薄切り肉の赤身二百グラム、じゃがいも４個、タマネギ一個。牛肉を一口大に切る。じゃがいもは一口大の乱切り、面取りして水にさらす。タマネギはくし型切り。なべに水カップ１、じゃがいも、タマネギをいれて火にかけ、煮立ったら牛肉を加える。砂糖大さじ２、しょうゆ大さじ３を加え、味を馴染ませながら煮る。じゃがいもが柔らかくなり煮汁がなくなるまで……。

佐藤　これを毎日、欠かさず？

塩田　みたいね。

佐藤　その日のできごとは簡単だけど、献立の説明は詳しいわね。

塩田　だから日記を調べれば、彼女が三十一年間にむいたジャガイモの数もわかるわ。刻んだキャベツの数も。お米を何トン食べ、何頭の牛を食べ、豚を何匹食べたかもわかるわけ。

佐藤　どうしてやめちゃったの？

初江　……。

塩田　この人、ひたすら家族のためにつくり続けてきたの。家計をやりくりして、体調を慮って、栄養のバランス考えて。それで

三十一年間、通算三万三千三百三十三食！

佐藤　その三並び、何か意味があるのかしら。

塩田　たまたまじゃないの。

暗転。

5

高木家のリビング・ダイニング。

麗子　何日になる？

剛史　え？

麗子　母さんが食事をつくらなくなって。

剛史　二週間ぐらいかな。

麗子　あんた、最近朝は食べないし、昼はファーストフードでしょ。

剛史　夜は食べてもいい。

麗子　お金がないからね。

剛史　姉貴はコンビニのロールケーキで生きていけるもんな。

麗子　こんなこと、今までなかったでしょ。

剛史　まあな。

麗子　どうしたのって聞いたら、冷蔵庫に何もないからって。冷蔵庫に何もないからつくれないんだって。

剛史　どうしてないの？

麗子　スーパーで買わないから。

剛史　母さん、スーパーのレジ係だよ。

麗子　パート始める前だって、スーパーに二日続けて行かないことなんてなかった。母さんにとってヤオコーの食品売場は台所の延長なの。どんなに忙しくても、体調が悪くても顔を出さないことなんてなかった。母さん、どんなにふさいでいるときだって、食品売場を歩いてるときは幸せそうな顔してた。チラシを見てるときの真剣な顔ってないの。レジ袋いっぱいの食材。それが母さんの幸福のバロメーター。給料日なんて五つも六つも抱えて、ふらふらしな

がら歩いてた……馬鹿みたい。

剛史　馬鹿っていうなよ。母さんは料理が好きだっていうだけだ。

麗子　嫌になったのよ、急に。馬鹿馬鹿しいってことにやっと気づいたの。気づくのが遅すぎたけど。

剛史　いいじゃない。ずっと休みなくやってきたんだから。ちょっとストップして、いろんなこと考えたっていい……母さん、踊り場にいるんだ、階段の。ずっと駆け上がってきてさ、ふーっと一息。

麗子　わかったようなことというわね。あんた、ほんとにそう思ってるの？

剛史　……。

麗子　どうして踊り場っていうの？

剛史　え？

麗子　踊るの？　あそこで？

剛史　踊らないよ。休むんだ。

麗子　じゃあ、休憩場じゃない。

剛史　……踊るのかな。

麗子　母さん、何を踊るつもりなの。

三郎　誰が踊るんだって？

高木三郎（五七歳）がいきなり現れる。スーツ姿。旅行鞄。

剛史　父さん。

三郎　麗子、やるのか？　シャルウイー、ダンス？　それともフラダンスか？

麗子　母さんよ。

三郎　母さんがフラダンス！

剛史　喩えだよ、本当に踊るわけじゃない。

三郎　安心した……剛史、大学は？

剛史　休みだよ。

三郎　麗子は？

麗子　バイト、クビになったばかり……今日はどうしたの？

三郎　世帯主が家に帰ってきちゃいかんか。

剛史　月末じゃないのに。こっちで急な会議でもあったの？

三郎　聞いてないのか？　終わっちまったんだ、単身赴任。来年までの予定だったが、九州の営業所を統合することになってな。それで、父さんの転勤先は無くなってしまった。

麗子（つぶやく）それは残念。

三郎　急といえば急な話だったが、母さんには二週間前に伝えておいたぞ……（卓袱台に気づき）何だい、こりゃ？

剛史　卓袱台だよ。

三郎　わかってるよ。

剛史　姉さん、知らなかったんだぜ。

三郎　じいちゃんの家にあったろ。

麗子　知らないわよ。

三郎　確か、おまえが卓袱台にちょこんと座ってる写真があったぞ。

麗子　覚えてないわよ、赤ん坊の頃のことなんて。

三郎　こいつ、なぜか卓袱台に上りたがるんだ。あげくに（笑い出す）。

剛史　どうしたの？

三郎　もらしたんだ、この上で。

剛史　だせえ！

麗子　知らないわよ！

三郎　ばあちゃんに尻たたかれてさ。びいびい泣いてさ。

剛史　そりゃ姉貴まずいよ。飯、食うところなんだから。

麗子　うるさいっ！

三郎　何でうちにあるんだ？

剛史　母さんが買ったみたい。

三郎　年代物だな。

剛史　骨董品？

三郎　所詮卓袱台だ……こんなものどうするんだ？

剛史　花瓶でも置くんじゃないかって。

三郎　……ずいぶん染みがついてる。

剛史　何の染み？

三郎　こぼれた醤油とか、味噌汁とか、もろもろの染みだ。いくらきれいに拭いても、

毎日使ってるんだから染みもつくんだよ。家族の何十年の食卓の染み。家族の歴史、家族の記憶。

剛史　この上でもらしたやつも。

麗子　だまれ！

三郎　じいちゃんの家にあったやつ、どうしちゃったかなあ。建替えたときに一郎兄さん、捨てたんだろうな。

剛史　使ってたんだろ、卓袱台？

三郎　ああ。

剛史　じいちゃん、どこに座ってた？

三郎　……親父はここにいて、こっちに俺がいて。一郎兄さんはここ。次郎兄さんがこっちだ。姉さんは……。

剛史　亡くなった貞子おばちゃん？

三郎　姉さんはここで、お袋がここだ。

剛史　六人家族で、こんな狭いところで食べたの？

三郎　うちのはもっと大きかったが、確かに狭かったよな。それでもちゃんと食ってた。おかずが少なかったせいかな（笑）。

麗子　息がつまらないの？

三郎　そういうことはなかったな。

麗子　何を話すの？

三郎　食ってるときはべらべら話さない。ご飯粒が飛ぶしな。怒られたよ。

剛史　もくもくと食べるんだ。

三郎　そりゃ、今日のおかずは美味しいねぐらいはいうけど。

剛史　一家団欒。

三郎　……そうだな。

剛史　じいちゃん、卓袱台返ししたことなかった？

三郎　なんだ、それ？

剛史　巨人の星だよ。

三郎　野球とどういう関係があるんだ？

剛史　父親が怒って食事中に卓袱台をひっくり返すんだよ、知らない？

三郎　ああ、ドタバタ劇でやる、あれか。ないよ、ない。そんなことやるやつ、実際に

はいない。考えてみろよ、後の始末がたいへんだ。それにお椀や皿も割れて大損害だろ。昔は雷親父がいたけどさ、怒るときもそのへんはちゃんと計算してた。

麗子　もったいないとか、後片付けがたいへんだとか、そんなこと考えられないくらい頭にくることだってあるんじゃないの？

三郎　……卓袱台返しか。

剛史　母さんの実家にもあった？

三郎　あったかな。

剛史　懐かしくなったんじゃない？　昔のことが。

麗子　昔の何がよ？

剛史　知らないけどさ……すごく頑丈だよ。

三郎　そうだな。しっかりしてる。

三郎、いきなり卓袱台をひっくり返す。

三郎　（剛史に）こうか？

剛史　あ、面白そう。俺にもやらせて。

麗子　ちょっと、やめなさいよ！

剛史、卓袱台をひっくり返す。

剛史　姉貴もやってみなよ。もしかすると母さん、ストレス解消のためにこれ、買ったのかも。

麗子　やめて、壊れてる！

剛史　壊れないよ、ほんとに頑丈だから。

麗子　こんなものどうでもいいの。壊れてるのは母さんの……。

暗転。

6

カルチャーセンター。

助手　今日は食材についてお話します。食材

を知ること、正しく理解することが本講座において最も重要です。食材についてわかれば、すべてわかったも同然……では講師、お願いします。

生徒2　今日も、子のたまわくですか？

助手　のたまいません。のたまいませんが、やっぱり中国の話から。

講師　えー、そもそも紙はいつ発明されたのでありましょうか。中国の歴史書「後漢書」に紀元百五年、後漢の和帝に蔡倫が紙を献上したところ、帝はひどく喜ばれ、褒め称えたと書かれてあります。これが紙についての最古の記録でありまして、これをもって蔡倫が紙の発明者のように思われていますが、実はそれよりずっと前から紙はつくられております。彼はそれまでの製紙の技術を改良し、世の中に広めたという点で功績があったわけです。さて、中国で発明された紙は世界中に広がっていきます。まずアラビアへそしてヨーロッパへと……。

生徒1（さえぎって）あの、お聞きしたいんですが、この講座は創作料理教室なんでしょ。食材のお野菜やお肉、お魚についてはふれないんですか？

講師　私は食材の話をしていますよ。

生徒1　さっきから紙の話ばかり。紙をお料理の器や飾りに用いるってことなんでしょうが、あくまでそれはおまけでしょ。

助手　おまけ？　おまけじゃないです。グリコならキャラメルの方。

講師　キャラメルは紙に包まれていますが。

生徒1　紙を食べるわけじゃないんだし。

助手　食べますよ。

生徒1　えっ？

講師　いただきます。

生徒1　……紙を食べるんですか？

助手　はい。ですからペーパークラウ。ペーパーを食らうという意味ですが、あなた、ご理解されてなかったようですね。

生徒1　ご理解してません。紙を食べるなん

て、山羊じゃあるまいし。

生徒2　私、ペーパークラフトには興味があります。ですが、紙を食べようとは思いません。食べれっこない。

初江　これ、紙料理の講座なんですか？

講師　その通り。みなさん、ちゃんと理解されていると思ったのですが。本講座では紙料理の真髄を学んでいただきます。

助手　奥が深いです。

講師（生徒2に）あなた、食べれっこないといいましたが、つくってみれば考えは変ると思いますよ。

生徒1　紙って食べるものじゃないでしょ。紙を食べる人なんていないでしょ。飢饉にでもなって、食べるものがなくなれば別でしょうが。

講師　その通り。かの昔、天明の大飢饉の時、ある村で古紙を水に漬け、よく蒸してほぐし、それに少しの砂糖をまぜて餅として食べた人がいたそうです。それがうまかったのでみんなにすすめ、村の寺にあった経本をすべて食べちゃったそうです。

生徒1　罰当たりですわ。

講師　おかげで村人は生き延びることができたそうです。お経が人の命を救ったわけですから、なんともありがたい話じゃないですか。紙を食べる話はほかにもあります。『古今著聞集』という鎌倉時代の説話集に紙を食う話が出てきます。字の上手い男がいまして、『古今集』の写本を頼まれます。写本ってご存知ですね。

生徒2　手書きで写すんでしょ。

講師　ところがいつになってもできあがらない。依頼者はしびれをきらして、もういいから預けた本と紙を返してくれといったんですが、その男がいうには紙はすっかり食ってしまったというんです。紙だけじゃない。預かった古今集まで食ったというんですな。依頼者はあきれてものがいえなかったというお話。

生徒２　ほんとですか、それ？

講師　男は、〝紙みそうづ〟にして食ったと申告しています。みそうづとは雑炊のこと。

生徒１　紙を雑炊に入れるの？

講師　ほかにも紙を入れた米粉だんごのすいとんがあって疫病除けのまじないにしたという記録もあります。紙は決して食べないものではないということをご理解いただけましたか？　そんなに昔に遡らなくても、戦中戦後の食べ物の無い時代に紙を食べた日本人はいたと思いますよ。

生徒２　そういえばテレビでお笑い芸人が、お金がなくてティッシュにマヨネーズをつけて食べたって。

講師　みんな一度は考えてみるんですよ。特別なことではない。

初江　それって、異食症では？

講師　ほお、専門的な言葉をご存知ですな。家族に摂食障害の方でもおられますか？

初江　……。

助手　異食症は土とか毛、氷、チョークなどが無性に食べたくなります。紙もそう。

生徒２　じゃ、やっぱり病気なんじゃない。異常なんじゃないの。

講師　珍しいでしょうが、決して異常ではありません。世界にはいろんな食べ物があります。中には私たち日本人にしたら到底口にできないものを食べている民族がありますよ。鼻がひんまがりそうなのや、気味の悪いものを実にうまそうに食べています。あれは異常ですか？

助手　外国人から見たら日本人の食べるもので信じられないものがたくさんあるそうですよ。生魚こそ最近は平気なようですが、納豆とかくさやとか。

生徒２　私も関西人ですから納豆は駄目です。あんな、腐って糸をひいたものを食べる人の気がしれない。

生徒１　腐っちゃないわよ。美味しいわよ。そりゃ世界中には変な食べものはあるけ

れど、みんな一応、生き物というか、生物でしょ。植物か動物。紙は違うわ。

助手　紙は植物ですよ。和紙はもちろん、洋紙もパルプチップですから木材です。

講師　戦時中、米軍の捕虜に牛蒡を食べさせたことが問題になったそうです。

生徒２　牛蒡を？

講師　木の根を食わせた。これが捕虜虐待だというんですな。

助手　海苔も西欧の連中には黒い紙に見えたそうです。

生徒１　どうしてそこまでして紙を食べないといけないの？

講師　食べてみたいと思ったこと、ありません？

生徒２　ないですよ。

助手　一度も？

生徒２　ええ。

助手　絶対に。

生徒２　ええ、絶対。

講師　誓います？

生徒２　ええ。

講師　紙かけて？

生徒２　神かけて。

講師　今の面白く無かったですか？　神と紙をかけてみました。

初江　あの、護符。神様の、神社のあれを、確か田舎の祖母が。

助手　ああ、それはよく聞きますね。

初江　でもあれは紙を食べるというよりはおまじないの意味で。

講師　はい。あなた、たいへんいいところに気がつかれましたね。つまり、紙に書かれていることが大切だということです。紙を食べるとは、紙に書かれていることを食べるということでもあります。

助手　情報です。

講師　たとえば、野菜。にんじんにはどんな栄養がありますか？

初江　カロテンが多く含まれます。

講師　正解。カロテンには、細胞膜の損傷を防ぐ作用があります。どうでしょう。それはにんじんの持っている情報と考えられませんか。食物はそれぞれ体に吸収されたときにどのような効果をもたらすかという情報を持っています。それらを理解した上で、我々は料理をします。

初江　栄養とかカロリーとかだけでなく味も大事では？　食感とか、季節感といったものも情報ですよね？

講師　そうです。食事とは食材のさまざまな情報を取り込むことです。そして料理とはその情報をうまく組み合わせ、体に吸収しやすくすることです。

生徒1　それはわかるけど、それがどうして紙につながるの。紙を食べる人もいるだろうけど、紙には栄養もなければカロリーもない。味もないんでしょ。それとも、紙を食べると書いてあることが吸収されて、頭に入るんですか？

生徒2　そういえば辞書を暗記するため食べた人の話、聞いたことある。あれ、ほんとに効果あるの？

生徒1　まさか。

初江　先ほど、講師がお経を食べた村人の話をされましたよね。どうなんでしょう。

講師　飢饉の話ですか？

初江　お経を食べると、それをみんな覚えてしまうんでしょうか。

講師　それについての記述はありません。ところで山羊の話ですが。

生徒2（うんざり）また山羊……。

講師　山羊はいつ頃から紙を食べたのでしょうか。記録はありませんが、ただ人間よりはずっと早くに食べたことは間違いないでしょう。なぜなら紙は当初、たいへん高価なものでした。それを伊達や酔狂で人間が食べたとは思えない。でも山羊は高いも安いもありませんから平気で食ってしまうでしょうね。もちろん山羊に食わせよう

と考える人もいない。では山羊は勝手に食ったということになるが、貴重な紙のそばに山羊がうろうろしているはずもない。では山羊は、いつ紙を食べたのでしょう。

生徒1　わかりませんよ、そんなこと。

初江　あの、お経ではないでしょうか。

助手　山羊もお経を食べた？

初江　はい。三蔵法師ではないですが、お経を運びますよね。キャラバンというか。そのときに山羊も一緒にいたのではないでしょうか。

講師　すばらしい！　私の考えと一緒です。隊商が山脈を越えていきます。いろんな商品とともに経典もあります。

生徒2　貴重なものでしょ。山羊なんかに食べさせないでしょ。

講師　盗賊です。

生徒1　盗賊？

講師　山賊といいましょうか。山賊が隊商を襲い、商品を奪います。しかし、彼らは経典なんぞには興味がないから捨てていく。それをたまたま残された山羊がいて、それこそ食べるものがないから口にしてみた。あ、結構いけるじゃないか。そんなところではないでしょうか。

生徒2　それってかなり強引では……。

初江　わかります。そんな気がします。

講師　何百年前のことかわかりませんが、おそらくそんなことがあったのでしょう。それ以来、山羊は紙を食べるようになった。これが私の説です。ただ、わからないのは紙をたべたことで山羊たちにどのような影響があったのか。山羊たちは子々孫々に、紙は食べることができる、結構美味しいぞということを伝えてきた。しかし、それだけでしょうか。もっといろいろなことを伝えてきたと思うのです。そしてそれは……。

助手　講師、時間です。

生徒2　何だかおかしな話になってきちゃったわ。

生徒1　私、やめようかしら。お金、もったいないけど。

講師　来週は『山羊のレストラン』の話を。

生徒2　あら、それ面白そう。

生徒1　うーん、どうしよう。

助手　乞うご期待！

暗転。

7

スーパー、ヤオコーの休憩室。

佐藤　知ってた？　日本で一年間に捨てられるお弁当、世界中に支援されている食料の三倍にもなるんだって。

塩田　私のいた学校の生徒がね、給食が食べることができないアフリカの子供のために募金活動をしたの。結構たくさん集まってね。それをどこかの支援団体に持っていった。地方版だけど新聞にも載ったわ。得意満面よ。でもそのアフリカの子供たちが満足に食べられない原因のひとつに、私たちが食べる牛肉や豚肉を生産するための飼料に穀物が使われていることがある、なんてことは全然学ばないわけ。

初江　……豚、飼ってたわ。

佐藤　あなたが？

初江　息子が。小学生のとき。クラスで豚を飼ったの。ぴーちゃん。自分が提案した名前が採用されたんで、うちの子、はりきって世話してたの。

塩田　餌はやっぱり給食の残飯？

初江　そう。だから、ぴーちゃんにあげるんだってわざと残す子もいるわけで、それはそれで問題になったの。当然、クラスの給食から出る残飯では足りないわけで、他のクラスからも集めてくるんだけど。よそのクラスの子は、餌を提供するんだからぴー

ちゃんにさわらせてと要求するの。でもそれを息子のクラスの子たちは拒否したの。自分たちのぴーちゃんだからって。それで家から残飯を持ってきたんだけど。

佐藤　残飯を？

初江　男の子は平気なんだけど、女の子はね。ビニール袋に入れてってというわけにはいかないし、たいへんだったみたい。

塩田　親も見栄があるんじゃない。残飯を他人に見られるわけでしょ。

初江　中にはどう見ても残飯とは思えないものまで入ってたって。

塩田　やっぱそうなるわよねえ。

佐藤　ぴーちゃん、栄養満点でどんどん大きくなったんじゃない。

初江　三年、飼ったの。うちの子が、剛史が一番かわいがっていた。うち、ペット飼ってやれなかったから。主人は犬が苦手、小さい頃噛まれたんで。娘は猫の毛アレルギーなの。息子、動物好きだったのに。

塩田　たいへんじゃない？　大きくなると、豚小屋の掃除も。百キログらいになるんじゃない？

佐藤　百キロ！

塩田　病気とかも心配しなきゃいけないし。

佐藤　豚って、動物病院で見てくれるの？

塩田　馬とか牛とかと同じ獣医さんでしょ。ペットというより家畜なんだから。

佐藤　そうよね、あれは家畜だもんね。

初江　ぴーちゃん、看病するって豚小屋に泊り込んだこともあったの。

佐藤　やさしい子ね。

塩田　それでどうなったの、ぴーちゃん。

佐藤　そうよね、どうなったの？

初江　……たいへんだった。

佐藤　食べたの、トンカツにして？

塩田　あんた、トンカツって。

佐藤　だって豚なんだから。

塩田　でもトンカツってのはちょっとストレートすぎない？

佐藤　そう？　ころもつけるんだし。あまり生々しいとは思わないけど。

塩田　せめてハムとかベーコンとか。

佐藤　そっちの方がむしろ。

初江　担任の先生はね、食育の一貫としてとらえていたみたいなの。命の大切さ、その命を糧にしなければ生きていけない人間というものを理解させる。だから、あくまで子供たちの意志を尊重するとはいえ、食べるという選択肢も考えていたんです。

塩田　志はわかるけれど、教育の場でやるのは難しくない？　可愛がってたぴーちゃんをある日、さあみんなで食べましょうといったってねえ。

佐藤　いのししし牧場、知ってる？

塩田　知ってるわよ。いのししのショーなんか見せるところでしょ。

佐藤　あそこにレストランもあって、そこでしし鍋出してるの。

塩田　しし鍋……。

佐藤　ショーを楽しんだ家族連れが、そこで食べるの。しし鍋を。でそのとき、子供たちに言うのかしら。「今、食べてるのはさっき芸をみせてくれたいのししさんのお肉なんだよ」って。

塩田　言わないわよ。

佐藤　言わない？

塩田　言わないわよ、普通。

佐藤　もし言ったら、子供、食べるかな。

塩田　……で、どうだったの？　ぴーちゃんの運命は。

初江　子供たちの間でも大激論になったの。多くがぴーちゃんを食べるなんてとんでもないという意見。でも、それはおかしいという子もいたの。豚は人間に食べられるために生まれ、育てられてきたのだから、食べてやることこそが彼のためであると。

佐藤　彼って、ぴーちゃん、オスなんだ。

初江　うちの子を筆頭に反対派はどちらかというと情に訴えようとしてるのに対して、

賛成派は論理的なの。理論派が多いの。「君たちは普段豚肉を食べてるじゃないか。ハムを美味しい美味しいって食べてるじゃないか。給食の献立の中にだって入っているじゃないか」

佐藤　理屈っぽい子、私、嫌い。

初江　同じ豚なのに、ぴーちゃんは食べられないというのはある意味差別だって。

佐藤　差別とは違うんじゃない。だってさ、親戚とか友だちとか、知ってる人が病気で亡くなったら悲しいでしょ。泣くでしょ。香典持って行くでしょ。でも全くの他人が同じ病気で死んだってきいてもなんともないもの。ああ、気の毒ねってくらい。泣けないもの。それと同じ。子供たちにとってぴーちゃんはただの豚でなくて親戚よ、友だちよ。友だちは食べないわ。それが豚でも鶏でも。

塩田　先生も予想できなかったのかしら。そうなることが。

初江　心配してたの。そんなことになるんじゃないかって。昔、田舎でウサギ飼ってたの。私が毎日餌をやって。

佐藤　ぴょんちゃん？

塩田　何よ、それ。

佐藤　うさぎの名前。

初江　それがある朝、小屋にいないの。どこにも。じいちゃんに聞いたら、「何寝ぼけてるんだ。初江、昨日、うめえうめえっていって食ったじゃねえか」って。

佐藤　あらら。

初江　吐いちゃった。とっくに消化しちゃってたんだろうけど。吐いたの。

佐藤　そりゃ親戚だもの。吐くわ。

初江　鶏も飼っていて卵だけでなく、肉も食べてたの。そっちは平気だったのに。

塩田　で、どうなったの？　ぴーちゃん。

初江　飼い続けることはできないでしょ。結局、業者に引き取ってもらったの……剛史、僕がうちで飼うなんて。

佐藤　無理よ、豚は。

初江「母さん、ぴーちゃんが殺されないようにしてよ。助けてやってよ。僕、ずっとお小遣いいらないし、母さんの言うこと何でも聞くから。一生のお願いだから」って、あの子、泣きながら……でも私、何もしてやれなかった。

塩田　しょうがないわ、一生のお願いでも。

初江　あの子にはすごいショックなことだったみたい。傷つけてしまったの。そのときはそんなに深刻に考えなかったけど。

佐藤　といってもねえ。

初江　豚肉、食べられなくなったの。

塩田　あら、わかりやすいトラウマ。

佐藤　馬？　豚でしょ。

塩田　豚肉、食べられなくなったら献立たいへんだったでしょ。

初江　それは何とかしたけど、中学校が給食だったから。

塩田　そうか、給食には出るわね。

初江　それが原因で中学の三年間、ひきこもっちゃった。

塩田　給食の豚肉でひきこもったの！

佐藤　そりゃたいへんだったわ。

初江　でも三年ですんだし。

塩田　三年も、でしょ。

佐藤　ぴーちゃんも罪なことしたわね。

初江　今はまったく受けつけないわけじゃないけど、あまり好きじゃないみたい。

佐藤　でもさ、イスラム教じゃ駄目なんでしょ。豚は不浄な動物だとかいって。息子さん、イスラム教徒になったと思えば。

塩田　いろいろうるさいのよ、あの宗教は。屠殺の仕方がどうのこうのって。

佐藤　イスラムの学校では豚は飼わないでしょうね。

塩田　飼うとしたら、山羊かな。

初江　……山羊は紙を食べるわ。

佐藤　子供たち、きっと宿題帳なんか食べさせるわよ。「山羊に食べられたのでできま

せんでした」なんていいわけしてね。

塩田　それから点数が悪くて親に見せられないテストの答案とか。

佐藤　教科書だって食べさせるわ。

塩田　教科書食べたら、山羊、頭がよくなるんじゃない。

初江　そう思う？

塩田　冗談よ。

初江　私たちも紙を。

佐藤　え？

初江　紙を食べてみればいいんだわ。

佐藤、塩田、顔を見合わせる。

暗転。

8

高木家のリビング・ダイニング。

三郎、普段着に。

剛史　父さんが帰ること、母さん、どうして黙ってたのかな。

三郎　驚かせようとしたんじゃないか。

剛史　驚かす？

三郎　ほら、母さん、よく驚かしてくれたじゃないか。何かの記念日とか、ちょっとしたおめでたいことやいいことがあったとき、内緒でご馳走を用意してさ……剛史が学級委員に選ばれたお祝いとか、麗子の生理が始まったお祝いとか。

麗子　やめてよ！

三郎　おまえたちが大きくなったら少なくなったけど、よくやったじゃないか。

剛史　お祝いだけじゃないよ。めげてるようなときにも。試合に負けたときや受験に失敗したときも。

三郎　女の子にふられたときもだろ。

剛史　わかるんだよ、母さんにはなぜか。

三郎　俺が同期に昇進競争で抜かれたときも。

大チョンボしてクライアントに怒鳴られたときも。

剛史「たくさん食べて！」

三郎「元気を出して！」

二人、笑う。

麗子　お節介だっていうのよ。

三郎　今回もサプライズってやつじゃないのか？　何か用意してるんだよ。

麗子　ないわよ。だって母さん、最近全然つくらないのよ。料理だけが生きがいの母さんが全然つくらないの。

三郎　全然？

麗子　冷蔵庫、空よ。

剛史の腕時計のアラームが鳴る。

剛史　おっと時間だ。

剛史、ピルケースを出し、中からサプリメントを二つつまむ。

三郎　おまえ、何してんだ！

剛史（水を飲みながら）サプリメント。

三郎　体、悪いのか？

剛史　悪かないよ。悪くならないようにしている。予防だ。

三郎　予防？

麗子　栄養剤よ。ビタミンとかミネラルとか、アミノ酸がどうとか。

三郎　やっぱ薬なんだろう？　何かが不足してるってことか？

剛史　食事だけじゃ足りないんだよ。

三郎　そんなことないだろ。母さん、そういうのきちんとやってたから。栄養失調になんかなるもんか。

剛史　いまどきそんな言葉、死語だよ（笑）。

三郎　……笑うな。飽食のこの国じゃ死語かもしれんが、貧しい国じゃ切実な問題だ。

父さん、去年、アフリカへ仕事で行ってきた。都会も村も、そこら中、栄養失調の子供ばかりだ。あっちじゃ栄養失調は文字通り死語、死の言葉だ。栄養失調なんてもんじゃない。飢えだ、飢餓だ！

麗子　興奮しないでよ。剛史、大学に入ってからうちで食べること少ないから。

剛史　父さんだって、外食ばかりだろ。

三郎　しょうがないだろ、単身赴任なんだから……（ピルケースを覗き込み）それ、何種類あるんだ？

剛史　十三種類くらいかな。

三郎　十三！

剛史　イソフラボン、レクチン、亜鉛、ポリフェノール、アントシアニン、葉酸、マグネシウム、ドコサヘキサエン酸……。

三郎　ど、どこさ……。

麗子　ＤＨＡよ。頭がよくなるんだって。

三郎　頭に効くのか……そんなにたくさん飲んで腹いっぱいになるだろ。

剛史　なるよ。でも飲まないと不安になる。

麗子　依存症よ。人のこと言えないわ。

剛史　うちに迷惑はかけてないぜ。これ、バイトの金で買ってるんだし。

三郎　味気なくないか？

剛史　味気ないさ。でも、こういうので全てすませる時代がくるんじゃないの。

三郎　飯を食わずにか。

剛史　一粒飲めば一日に必要な摂取カロリーも栄養も全て摂れる、なんてのができるんじゃない。満腹感もあって。

麗子　胃が退化しちゃうわ。

三郎　噛まないから顎や歯も駄目になるぞ。実際、昔と比べて固いものを食べないから顎は細くなってる。

剛史　それも進化のうちじゃないの。

三郎　飯を食う暇もない忙しい人には便利かもしれん。でもさ、飯を食う時間を楽しみに、いや飯を食うことを楽しみにしている人にとって、ポン、はい終わりではたまら

んじゃないのか？　満腹感はあるだろうが、食事の楽しみはかなえてくれないんじゃないのか。食事は手間と時間をかけてつくられる。それを手間と時間をかけて食べるもんじゃないのか。確かに、昔と比べればつくるのも食べるのもずっと早くなった。楽になった。でもやっぱり、ポン、はい終わりにはならんと思う。

剛史　食べる楽しみって脳が感じるんだろ。だったら脳に刺激を与える成分を加えればいい。美味さが大事なら、それも感じるようにすればいい。

三郎　食べ物は見て楽しみ、においで楽しみ、舌はもちろん、歯ざわり、のどごしとか、いろんなところで楽しむものだ。肉の焼ける音なんて耳で堪能する。そこまでカバーできるかね？　食事は能率じゃないぞ。

麗子　そういう薬で済めば確かに楽よね。食べること、考えなくていいのなら。

三郎　おまえ、まだ……。

麗子　何よ。

三郎　何よって……また吐いてるのか。

麗子　私のことはいいわよ。

三郎　いいってことは……。

麗子　ほっといて、私のことは。

三郎　……おまえ、全然太ってないぞ。

剛史　父さん、そういうの……。

三郎　会社にも女の子が大勢いるけどさ。おまえと同じくらいの年の子も。でもさ、おまえなんか全然、太ってない。

剛史　父さん、そういうの、駄目だって。

三郎　いや、そうなんだよ。嘘じゃなくて。

剛史　父さんの、そういう無神経なのが。

三郎　無神経とは何だ！

剛史　無神経だろ！　だから姉さんも。

麗子　……和美が家に遊びにきたとき、父さん言った。「やあ、和美ちゃんはすらっとしてスタイルいいねえ。まるでモデルさんみたいだ。男の子に人気あるだろ。おじさんがヤングだったら、猛烈にアタックかけ

ちゃうんだがなあ」

三郎　……。

麗子　何がヤングよ。何がアタックよ。馬鹿親父の戯言と受け流せばよかった。

三郎　馬鹿親父って、おまえ……。

麗子　当時、私の憧れている先輩がいた。でもその先輩、和美のこと気にいってたの。

三郎　それがきっかけだというのか？

麗子　きっかけかもしれないけど、父さんが私のことデブって言わなくても。

三郎　言ってないだろ、そんなこと！

麗子　どのみちおかしくなってたと思う……原因はわかってるの……ねえ、父さん、向こうに女の人、いたでしょ？

三郎　何だよ、急に話を変えるな！

剛史　俺、知らないぞ。

麗子　隠したって駄目。母さん、知ってるよ。

三郎　（狼狽）誤解だよ、誤解。そりゃ誤解なんだって、裕子と私とは全然、あれの関係じゃないんだ。

剛史　裕子って誰？

三郎　だから福岡の天神の、キャバクラの。

麗子　そんな女の人がいたの！

三郎　そのことじゃないのか。

麗子　相手の名前まで知らないわよ。

剛史　語るに落ちた。

三郎　母さんやおまえがどう思ってるか知らないが、裕子と私とは全然、あれの関係じゃないんだ。

麗子　あれって何よ。

三郎　そういう関係じゃないんだ。

剛史　どういう関係なんだよ。

三郎　最初は客の接待で。それから馴染みになった。ただな、何というか……。

剛史　まさかプラトニックとかいうんじゃないだろうな。

三郎　それとも違う。つまりな、つまり肉欲がどうこうというのでなく。

麗子　肉欲……。

剛史　少しは言葉を選べよ。

三郎　いや、その性欲を満たすんじゃなくて、

食欲を満たす関係だ。父さんのじゃない。彼女の食欲だ。つまり父さんは、彼女が食欲を満たすのを手伝って、それを眺めるのを楽しみに……。

剛史　要するに、彼女に飯を奢ってたってことだろ。昔流行ったメッシーってやつだ。何だよ、もってまわった言い方して。つまり父さんは、さんざん奢らされて何もさせてもらえなかったってことだ。かっこ悪いなあ。いくつなんだい、その子？

三郎　二十四。

麗子　いやらしい。私より若い。

三郎　半端じゃないんだ。

剛史　何が？

三郎　彼女の食べる量だ。おまえたちには到底想像できない量を食べるんだ。一気に塩カルビを二十人前食べてしまう。

剛史　何だよ、そいつ。相撲取りか！

三郎　痩せ型だ。でも食べる。尋常じゃない。キャバクラに勤めたのも、普通のＯＬの給料じゃ食費が全然足りないからだ。

剛史　この給料じゃ食えませんってか。それで親父が貢いでると。

三郎　そういうことになるのかな。

剛史　その大食い娘が飯食ってるところをニヤニヤしながら見てるわけだ。馬鹿じゃなかろか。やらせてくれるわけでもないのに。

麗子（剛史に）あんた、二言目にはやらせるとかやらせないとか、下品よ。

三郎　でも剛史、一度食うところ見たら感激するぞ。壮観だぞ。マジックだ。あの細い体のどこにあれだけ大量の塩カルビが入るのか。まさにイリュージョンだ。

剛史　ああいうのはさ、テレビにもよく出てくるけど、特異体質なんだよ。まず胃袋が特別製で大量に収納しちゃうの。それから脳の満腹中枢が働かないの。そして腸での吸収効率がひどく悪いんだよ。

三郎　吸収しないのか？

剛史　あたりまえだろ。それだけのものを普

通に吸収したら必ず太る。いや太るぐらいじゃすまない。体、壊す。病気になるよ。早い話が、体のまん中を太いパイプが通ってるだけ。そこを食い物がすーっと通過する。それだけのこと。

三郎　なるほど。さすが工学部。

剛史　関係ねえよ！

三郎　……可哀相なんだよ。

麗子　誰が、その子が？

三郎　食べても食べてもおなかいっぱいにならないんだぜ。ある意味、飢餓状態だ。彼女さ、食べてるとき、ほんとに幸せそうな顔してる。

剛史　そりゃ只だしな。

麗子　母さん、可哀相。

三郎　だから、浮気してるわけじゃ。

麗子　浮気の方が許せたわよ。母さん、父さんのこと、いつも心配してた。「父さん、ちゃんと食べているかしら。自炊なんかしないだろうけど、悪くならないおかず、タッパーに入れて送ろうかしら」って。

三郎　送ってきたよ。

剛史　それも大食い娘にやったんだろ。

三郎　全部はやらん。半分だ。

剛史　やったのかよ！

三郎　すごく美味しいって。

麗子　母さん、内緒で何度か福岡へ行ってるのよ。その娘のことも知ってるはず。

三郎　……。

剛史　テレビに出たことあるんじゃないの。大食い選手権かなんかに。

三郎　それはない。本人はどちらかというと隠したがってる。そんなので有名になったら職場でいじめられたりするし。

剛史　売れっ子じゃないの？

三郎　まあ、そんなには。

剛史　父さんの相手してくれるんだものな。それに、彼氏ができてもひかれちゃうだろう、それだけ食えば。

麗子　そんなの黙ってるわよ。

剛史　いつかばれるだろ。

麗子　可愛い顔して、ぴーちゃんみたいにがつがつ食べるんじゃね。

剛史　ぴーちゃんのことはいうな。

暗転。

9

カルチャーセンター。

助手にスポット。童話『山羊のレストランの新メニュー』の朗読。助手は角のついた山羊のお面を頭につけている。

助手　三丁目には山羊のレストランが全部で十五軒もありました。角の間に煙突のように背の高い帽子をのせた『ペーパームーン』のシェフは三丁目のレストラン街で一番の腕前といわれていました。味付けもさることながら、盛り付けの美しさも評判で、店はいつも予約がいっぱいでした。先月のフルコースメニューを紹介すると、前菜は食べてしまうのがもったいないくらいのきれいな鶴と兜の折り紙、こってりとした和紙のスープには銀紙がちりばめられています。メインディッシュはぶ厚いオックスフォード英語辞典のステーキに、柔らかティッシュ添え、デザートはクリスマスカードとバースデーカードの二色アイスといった具合でした……シェフは新しいメニューづくりに熱心で、その日も材料を求めて紙市場に出かけました。市場には各地から集められたいろんな種類の紙がありました。しかし、シェフのおめがねにかなう材料はありません。帰ろうと思ったそのとき、シェフの目をとらえたものがありました。地図です。束になった世界地図は虫食いのない新鮮なものでした。地図はめったに市場に並ぶことはありません。「これ

は掘り出し物だ！」しかも聞いてみるとびっくりするような安さです。シェフは全部買い占めると、とぶようにして帰り、調理場にこもりました。「うちの店のこれまでのメニューの中でも最高のものになるぞ」予想通り、新メニューの『世界地図のムニエル・セロハンソースがけ』は大評判になりました。うわさを聞いたお客が押し寄せ、あっという間に材料はなくなってしまいました。

助手、一旦、本を閉じる。

生徒1　それで終わり？

助手　後半がありますが、続けます？

生徒2　それじゃ中途半端よね。

助手　長いけど、いいですか。

初江　お願いします

助手　それでは（本を開く。再びスポット）……それから一月ほどたったある日のこと、お店に保健所の所長が訪ねてきました。保健所がくるのは食中毒の疑いがあるときですから、シェフとしてはあまり歓迎したい客ではありません。「今日は何の用事ですかな？」

講師（講師も山羊の面をつけて参加。保健所長の台詞部分を担当）「実は最近町で妙なことがおきているのです。それというのは、方向感覚失調症の患者が急増しまして」

助手「ほうこう、かんかく……」

講師「失調症。すなわち自分の思ったとおりの方向へいけなくなる病気です。右へ曲がったつもりが左に。東へ向かいたいのにいつのまにか北へ向かってる。重症者は歩いて五分ばかりの学校や会社に行くのに半日もかかる」

助手「そのおかしな病気とうちの店と何か関係があるのですか？」

講師「患者たちに何か共通する点はないか調べたところ、たった一つあったのです。実

は全員、ここ一月の間にこちらで食事をしていたのです」

助手「な、何だと！　うちの料理が原因だというのか！　うちの店はじいさんの代から保健所なんぞに一度も世話にならなかったんだ。それを、それを……」

講師「私どもも仕事なのですから、どうか怒らずにご協力下さい。この一月の間に何か変わったものは出しませんでしたか？」

助手「世界地図のムニエルのことか」

講師「材料は残っていませんか？」

助手　シェフが調理場をさがすと、世界地図の切れ端が一枚残っていました。

講師「ふーむ、見たところどうということのない地図ですな……ちょっと待って。こりゃおかしい、うん、やっぱりおかしい」

助手「何です、なにがおかしいんです」

講師「見てください。方角表示が違っている。こりゃミスプリントだ」

助手　保健所長の指摘通り地図の方角表示が違っていました。北を指すはずが西を指しています。おそらく印刷所が廃棄した不良品を誰かが市場に持ち込んだのでしょう。

講師「こんな地図を食べたら、方向感覚失調症になるのも無理ありませんな」

助手　所長にそういわれ、シェフはしゅんとなってしまいました。でもまもなく患者たちの症状は消え、ペーパームーンも一週間の営業停止処分ですみました……それからだいぶたったある日のこと、シェフはまた紙市場で新メニューの材料をさがしていました。と、あるものが目にとまりました。楽譜です。そこには楽譜が山積みされていました。シェフは滅多に出回らない楽譜を驚くほど安い値段で手に入れることができました。「それもモーツァルトの交響曲だ！」作曲家の頭にメロディが浮かぶようにシェフにも素晴らしい料理のアイデアが浮かんだようでした。「ペーパームーン、始まって以来の最高のメニューにな

るぞ！」……ところでシェフは料理の腕は一流でしたが、音楽はそう得意ではありませんでした。もし音符を正しく読むことができたら、その楽譜は買わなかったと思います。なぜって、そこら中写し間違いだらけだったからです。さて、そんなひどい楽譜を使った料理を食べたら、いったいどんなことになるのでしょうね。おしまい。

初江、拍手。

講師　どうですみなさん、紙料理のイメージが湧いてきましたか。

生徒１　私にはぴんときませんが。

生徒２　何だか怖くなったわ。

初江　この童話の作者は、実際に紙を食べたのでしょうか。

講師　食べなければ、こんな童話が書けるはずがありません。

生徒１　わたし、いまいち。

講師　では百聞は一見にしかず。紙料理をお見せしましょう。

助手、台に紙料理を載せて運んでくる。

生徒１　……これが、紙料理？

生徒２　よくできたペーパークラフトって感じ。

講師　いかが？

生徒２　つくってみたい気はしますが。

講師　（初江に）あなたは？

初江　素敵です。きれいです。講師はいつもこれを召し上がってるんですか？

助手　講師は三食とも紙です。紙以外口にしません。

生徒１　紙だけにしては太っているわね。

生徒２　かなりメタボってる。紙に栄養なんてないのに。

講師　不思議ですか？　それが紙料理の神秘なのです。何の栄養価もない紙をただその

まま食べても駄目です。それが料理の仕方ひとつですばらしいディナーに変わる。

助手　マジックです。

生徒1　マジックには種があるわ。

生徒2　種もしかけも。

講師　では言い直しましょう。魔法です。

生徒1　魔法？

生徒2　ちょっと怪しくなってきたわね。

講師　魔法には種はない。信じるか信じないか、それだけ。

生徒1　宗教みたいなものかしら。

講師　何はともあれ、召し上がってみませんか。見ているだけでは何もわかりません。百見は一口にしかず。まずは、口に入れてみることです。

助手、口にするよう促すが、生徒1と2はなかなか、食べようとはしない。初江、口に入れる。全員注目。

初江　……あ。

生徒1　どう？

生徒2　美味しいの？

初江　美味しいとかいうのでなく。

生徒1　まずいんだ。

生徒2　だって紙だもの。

初江　不思議な味。

生徒1　そりゃ不思議でしょうよ。

生徒2　のどにつまらない？

初江　何か……。

生徒1　何？

生徒2　吐き出していいのよ。

初江　懐かしいような。

生徒1　初めてじゃないの？

生徒2　前世が山羊だったのね。

講師　さあ、みなさんも。

生徒1、2、おずおず口に入れてみる。

生徒1　うーん。

生徒２　うう。

講師　いかがですか？

生徒１　やっぱり紙。

生徒２　それとちょっとかび臭い。

講師　古本を材料にしているが、貴重なものですよ。なかなか手に入らない品です。

生徒１　私、やっぱ向いてない。

生徒２　わたしも無理。

講師　誰もがこの人のように初めから食べられるものではありません。これは一種の才能です。でも、あなたたちも努力すれば。

生徒１　努力したくない。

生徒２　飾りとしてはおもしろいかもしれないけど。

初江　このあと、どうなります？

助手　どうなるとは？

初江　童話の山羊みたいに、食べたものが脳に働きかけることがあるんでしょうか？

助手　それも才能です。才能というより相性。あなたの体と、脳と紙との相性ですね。

初江　私と紙の相性がよければ、食べた紙の中味が頭に入ってきますか？

助手　あなたが選ばれた人、カミの子であっても、やはり精進が必要です。

初江　しょうじん……。

助手　精進というより信心といってもいいかもしれません。

初江　信心ですか？

助手　はい、カミへの。

暗転。

10

スーパーの休憩室。

塩田と佐藤の二人だけ。初江はいない。

塩田　変ね。

佐藤　変よ、絶対。

塩田　あれね。

佐藤　あれよ、絶対。

塩田　カミを食べるなんて。

佐藤　とんでもない話よ。

塩田　そう変よ。

佐藤　変よ、絶対。

塩田　あれよ。

佐藤　あれよ、絶対。

塩田　カミの料理なんて。

佐藤　おそれおおいわ。でも高木さん、すっかり夢中なんでしょ。

塩田　取り込まれてしまった感じ。あれはもう危険な兆候よ。

佐藤　やつらの目的は何なの？　高額な壷とか数珠とか買わせるの？

塩田　黒羊会というらしいの。

佐藤　こくよう？

塩田　黒い羊。

佐藤　紙を食べるのは洗脳のため？

塩田　洗脳にしてはちょっと……単なる儀式のような気もするけど。

佐藤　そうよね、紙を食べたらそこに記されていた情報が脳にプリントされるなんて、荒唐無稽にも程があるわ。

塩田　そんなこと言ってるの？

佐藤　言ってるみたい。

塩田　高木さん、心が疲れてるから、あやしげな連中につけこまれるのよ。

佐藤　一途になるタイプだし。

塩田　のめりこむから心配。

佐藤　高木さんね、レジ打ちながら考えてるんだって。〝この人のおうちの今日の夕飯のメニューは何かしら。子どもは何人いるのかしら。ご主人は夕飯をおうちで食べるのかしら〟……それだけじゃないの。このうちは肉ばかりで野菜が少ないとか、塩分の多いものが多すぎるとかチェックして。

塩田　お客さんに注意してるの！

佐藤　そこまでしないわ。のど元まで出かかってるだろうけど。

塩田　……あの人、今、人生の踊り場だから。

佐藤　踊り場って？

塩田　階段の途中にある。

佐藤　平らなところ？　休憩場っていうんじゃないの？

塩田　意味的には休憩場なんだけど。

佐藤　何で踊り場なの？　踊るの？

塩田　踊らないわよ……踊るのかな。

佐藤　踊ったのよ。今はともかく、昔は。

塩田　どんな踊り？

佐藤　わからないけど、踊ったのよ。

暗転。

11

高木家のリビング・ダイニング。

麗子　この卓袱台……。

剛史　うん？

麗子　母さん、取り戻したいのよ。

剛史　何を？

麗子　母さんの食卓を。母さんが食卓をとりしきっていた頃に戻りたいの。テーブルの上にはいつも手づくりのメニューが並んでる。手抜きのない、栄養のバランスのとれた、多からず少なからず、安全で、添加物が少なくて、子どもの成長と健康を考え、父さんが成人病にならないように、細かいところまで気をつかったメニュー。母さん、ずっとつくり続けてきた。それから誕生日、クリスマス、お正月、季節のさまざまな行事、催し、節目節目をいつもご馳走で彩ってくれた。なのに……。

三郎　なのに。

麗子　娘は過食症になって、食べては吐き、病院通い。夫は赴任先でフードファイターみたいな大食い女にいれあげてる。中学でひきこもった息子は、大学生になった途端、

家でめったに食べなくなり、あてつけのようにファーストフードにサプリ三昧。

三郎　母さん、呆れ果てたか。

麗子　私、家族って、一緒に食べることでつながっている関係なんだと思う。大昔、狩をして獣をとってきたり、木の実や貝を集めてきて、それを家族で分けて食べた。それをしきっていたのは母親。家族って、母親が食事を通じて結びつけていたものだって思う。

三郎　家族が火を囲み、父親がとってきた肉を母親が焼いて、それを子供たちに分け与える、か？（卓袱台を見て）この時代も同じだったのかな。

剛史　くっついてさ、お互いの顔を見ながら。子供はみんな自分の取り分が少ないと文句をいい、弱い弟の分を奪い、それを母親がたしなめる。父親は、その獲物をいかに巧みに捕まえたか自慢する。

麗子　母親は今日も一日、家族にひもじい思いをさせることなく過ごせたことに安堵し、感謝する。

三郎　母さんの食卓、か。

麗子　……でも怖い。

剛史　え？

麗子　……母さん、私が小学校へ上がる前から食事の手伝いさせたでしょ。

三郎　そういやよくやってたな。

麗子　母さん、いつも言ってた。「麗子、お料理が上手だとね、女の子は幸せになれるの。男の人はお料理が上手な女が好きだから、すてきな人と結婚できるわ。自分だけじゃないの。旦那さんや子供たちも幸せにしてあげられるの。だから、お料理上手になろうね」。

剛史　言いそうだな。

麗子　小学三年のときだった。その日、母さん、調子が悪くてずっと寝てたの。それで私、母さんに内緒で、一人で夕飯の仕度をしたの。父さんの好きだった筑前煮も見よ

う見まねでつくったの。たいへんだったけど、我ながらうまくできたと思った。母さん、喜んでくれると思った。

三郎　……。

麗子　母さん、味見して、「まあ、うまくできたわね。母さんより上手よ」って褒めてくれた。父さん、その晩は帰りが遅かった。私は父さんにも褒めてもらいたくて、ダイニングに行った。でもテーブルに私のつくった筑前煮はなかったの。母さんにどうしてって聞こうとしたら、すごく怖い顔して「いつまで起きてるの、もう寝なさい！」って怒鳴った。次の朝、残飯のバケツを見たら、私の筑前煮が捨てられてたの。

剛史　父さん……。

三郎　俺が捨てるわけないだろ！

麗子　それ以来、母さん、私に料理を教えたり、手伝わせることはなくなったの。

間。

三郎　父さんもひとつ話そうか。

剛史　何だよ、あらたまって。

三郎　父さん、今年で入社三十三年だが、転勤は今回の福岡が初めてだ。それまで一度もなかったろ。これって、かなり異例なことなんだよ。まあ、そのせいで課長どまりなんだが、なぜだと思う？　父さんもそのわけを知ったのは二年ばかり前、ついこの間のことだったんだが。

麗子　母さんと関係あるの？

三郎　母さんと俺は職場結婚だが、同じ頃母さんと仲のよかった同僚の女の子が、社長の奥さんになったんだ。

剛史　玉の輿？

三郎　そうだな。で母さんは、社長夫人になった親友にこう頼んだそうだ。「うちの人は私の作った食事じゃないと駄目なの。だからお願い、絶対に転勤はさせないで。でないとあの人、死んでしまうから」

麗子　……。

三郎　母さんの直訴のおかげで、父さんは転勤と無縁だった。評価されていないから転勤もないのだと、ずっと思ってた。社長が交代して、初めて理由を知った。

剛史　そのことで母さんを責めた？

三郎　いや、何も言わなかった。言ったところでどうなる？　そうだろ？　遅まきながら転勤が決まって、うれしかった。何がうれしいって、自由に、好きなように飯が食えることだ。それまでだって外食はしたさ。つきあいの席もあった。だが、いくら今晩はいいといっても母さんは俺の分をつくった。それに手をつけないと、三日ぐらい口をきかなかった。

麗子　……母さん、父さんがいないのに、剛史が家でほとんど食べないのに、今でも夕食はしっかり四人分つくるの。必ず四人分なの。お皿もお椀も箸もみんな、四人分並べるの。食べきれないから最後は捨てるんだけど、そのときの顔って……。

三郎　大げさな言い方をすれば、舌と胃袋をずっと支配されていたんだ。もちろん、母さんにそんなつもりはないだろう。父さんの体を気遣ってくれてることは十分わかってる。ありがたいことだ。だが……。

剛史　うんざりしてた。

三郎　それは……。

剛史　俺もそうだったから……母さんに悪気なんてない。でも、やめてほしかった。逃げたかった。そうだろ？

三郎　でもな、駄目だった。外で何を食べても、母さんのつくるものと比べてる。母さんの味と比べてるんだよ。母さんなら、母さんならって……おかしいよなあ。

剛史　母さんの呪縛から逃れられない？

三郎　かもな。裕子に飯を食わせてることだって、何だか、母さんと同じことをしてるような気がしてならないんだ。

剛史　……ぴーちゃんのこと、俺、母さんに

何とかしてって頼んだ。泣いて頼んだ。正直無理だと思ってた。結果があなったからって、精一杯やってくれた母さんを恨んだわけじゃない。でもね、あとからわかったんだよ。母さん、先生にこう言ったらしい。「豚は断然食べるべきです。栄養もあるし、美味しいです。いろんなメニューに使えます」って。ぴーちゃんを助けるつもりなんて最初からなかったんだ……給食の豚肉が食べられず、学校へ行かなくなった。母さんを困らせることができると思った。でも母さん、困ったような顔してほんとは喜こんでたんだ。「ねえ、剛史、お昼は何にする？　好きなものつくってあげるわよ」。

玄関チャイム。

麗子　帰った。

麗子、出て行く。

宅配ピザの箱を三つ抱え、戻ってくる。

剛史　何？　ピザ？　姉貴、頼んだの？

麗子　頼まないわよ。

剛史　うちのじゃないだろ。

麗子　母さんが頼んだみたい。

三郎　母さんが？

麗子　代金はもらってあるって。

剛史　母さんがピザを……。

三郎　遅くなるから食べてくれってことか。

麗子　それにしても……。

三郎　こういうの好きじゃない母さんにしては、ある意味サプライズだな。

剛史　食べる？

三郎　食べようか。俺、腹減ったよ。新幹線で何も食べなかったから。麗子もどうだ。

麗子　ちょっとだけなら。

剛史、ピザの箱を卓袱台に置く。

剛史　ここで食おうぜ。

麗子、皿とフォークを取りにいく。

剛史　聞いたことないピザ屋だな。（箱を空ける）……何だ、こりゃ？

麗子　どうしたの？

剛史　これ……紙だ。

三郎　紙？

麗子　……ほんと。でも、ピザの形してる。

三郎　商品サンプルか……違うよな。あ、あれだ。夏休みの宿題の……。

剛史　工作。

三郎　結構細かくできている。冗談にしては手がこんでるな。

麗子　誰の冗談なの？

三郎　そりゃ、母さんだろ。

剛史　ペーパー、ウォーム。

麗子　え？

剛史　ピザ屋の名前。

三郎　ペーパー、ウォーム？

麗子　ウォームは虫よ。

剛史　紙の虫？

三郎　紙魚だ。

剛史　しみ？　染み？

三郎　紙を食べる虫だ。本につくやつ。紙の魚って書く。

麗子　この店、紙のピザを販売してるの？

剛史　何のために？

三郎　食べるんじゃないか。

剛史　紙を食べるの？　山羊じゃあるまいし。

三郎　山羊御用達のピザ屋とか。

剛史　そんなもの、あるかよ！

麗子　（箱の説明文を読む）なるべくお早めにお召し上がり下さい。なおレンジ等で温めなおすと、発火するおそれがありますのでおやめください。

三郎　な、やっぱり食べるんだろ。

麗子　三人から四人前とあるわ。

剛史　それが？

麗子　三匹から四匹じゃない。つまり、これは山羊のペットフードじゃなくて、人間用ってことよ。

剛史　紙だぜ。紙を食えっていうの！

暗転。

12

カルチャーセンター。

生徒１、２、初江の机の前には紙料理の材料と調理用具がある。

よくみると、スーパーのパート仲間の佐藤が生徒１の衣装をつけ、塩田が生徒２の衣装をつけている。つまりすり替わっているのだが、そのことに講師も助手も初江も気づいていない。

助手　紙料理の場合、焼いたり炙ったりはありません。当然、火気厳禁。切る、折る、千切る、削る、揉む、畳む、破る、丸める、裂くが基本。さらには織る、結ぶ、捩るといった高度な技もあります。道具としてはハサミ、これですね。ハサミも種類は豊富ですが、使いやすいものでよろしい。カッターも使います。細かい細工をするときに便利ですね。それと糊。

生徒１　糊を使うの？

助手　なるべく使わないのがいいのですが、初心者の場合、立体的に組み上げるときはどうしても必要になります。しかし、便利だからといって市販の糊や接着剤を使ってはいけません。あくまで自然なもの、すなわち、お米をつぶしたものを使います。

講師　汚染米には注意を。

助手　もちろんホッチキスやクリップなど金物、プラスチックは厳禁。なんせ口にするものですから。

初江　あの。

助手　質問ですか。はいどうぞ。

初江　これ、絵の具で色をつけるようなことはしてもいいのですか？

助手　できたら彩りは色紙を使っていただければよろしいかと。

初江　絵の具には添加物があるから？

生徒1　そんなことといえば、印刷されたものにはインクがのっているわけでしょ。あれも化学薬品が入ってるんじゃないの？

助手　厳密にはそうですが、許容範囲ということで。完全に有機食材だけというわけにはいきません。ただ今後は、大豆を使ったインクを使用した印刷物に移行していくでしょう。

生徒1　大豆のインク？

助手　ソイインクといいます。

生徒1　やっぱり時代は紙を食べる方向に進んでいるんだ。

生徒2　馬鹿ね、本気にしないで。

助手　では次に、紙についてご説明します。紙といっても、ダンボールのような厚いものから、上質紙、アート紙、コート紙、コピー用紙、ごくごく薄いものまでいろいろあります。それぞれに歯ざわり、食感が違います。そしてこの食材を手に入れる方法ですが、文房具屋から購入することもありますが、我々の身の回りにある紙製品で賄うのが原則です。つまりリサイクル食材といってもいいでしょう。その代表が書籍や雑誌です。

生徒2　新聞は？

講師　新聞は食材としてはかなり落ちます。低級食材です。紙質がよくないし、インクもよろしくない。栄養価、すなわち情報の質もよろしくない。くだらん記事ばかりだ。

生徒1　新聞、嫌いなのね。

講師　さて、紙料理においてもっとも高級な食材とは何だと思いますか？

生徒1　金紙や銀紙かな。

生徒2　違うわよ、稀覯本ってやつよ。古本屋のケースに並べてあるやつ。

講師　確かに稀覯本は食材としては貴重ではありません。しかし、いかんせん値が張る。いわば珍品の類で一般向きではない……（初江に）あなた、どうです。

初江　活字ではなく、手書きのものではないでしょうか。

講師　正解。手書きのものというと何を思いつきます？　身近なもので。

初江　……手紙ですか。

講師　そう、手紙です。手紙こそ、紙料理の食材としてもっとも高級な、まさに味のあるものです。もちろん、ワープロはだめですよ。あくまで手書きです。

生徒1　そういえば、黒やぎさんと白やぎさんが食べたのも。

生徒2　手紙だったわね。

講師　しかし手紙ならなんでもいいというわけではない。やはり内容によります。借金の申し込みとか、絶縁状や脅迫状、うらみつらみをぶつけたものはいただけません。

助手　おなかをこわします。

講師　ではどんな手紙がいいか。

生徒1　わかった、ラブレターでしょ。恋文。

助手　とりわけ遠く離れていたり、よんどころない事情でなかなか会えぬ二人の交換書簡など絶品です。携帯なんてない昔のものは情緒があります。

講師　他には？

初江　母と子の……。

講師　そうです。都会で一人暮らしをしている息子へ田舎の母親が送った手紙。普段、字などあまり書くことのない無学な母親が荷物の中にひそませた手紙。そこには内職で貯めたわずかばかりのお金も入っているでしょう。金釘流の文字で、「からだにきおつけて、おいしいものお、たべてください」などと平仮名ばかりで書かれているかもしれません。

生徒１　駄目、そういうの。私、滅法弱いの。

講師　そんなやさしい母の手紙は、どんな味がするのでしょうね。

生徒１　汗と涙のちょっと塩味。

助手　これがほんとのおふくろの味。

生徒２　ちょっと待って。そんな手紙、個人的なものでしょ。古本じゃないんだから、簡単に手に入るものじゃないでしょ。

助手　そう。そこが問題なんです。なかなか出回るものではない。まあ、だからこそ高級食材なんですがね。

生徒２　それでも出回ってるの。

助手　市場があるんですよ。童話と同じように紙の市場があるんです。あ、葉書もあります。葉書の方がいくらか安い。それも年賀状とか暑中見舞いなんてのはかなり安いですね。一束いくらの世界。しかし、ものによっては天井知らず。値がつけられないものもある。

講師　円谷幸吉さんをご存知ですか？

生徒１　東京オリンピックのマラソンで銅メダルとった人。

生徒２　確か、自殺されたんですよね。

助手　そうです。一九六八年一月九日。円谷さんの遺書はノーベル賞作家川端康成が絶賛した美しい文章で……。

講師　父上様、母上様、三日とろろ美味しゅうございました。干し柿、餅も美味しゅうございました。敏雄兄、姉上様、ブドウ酒、リンゴ美味しゅうございました。巌兄、姉上様、しそめし、南蛮漬け美味しゅうございました。喜久造兄、姉上様、ブドウ液、養命酒、美味しゅうございました。幸造兄、姉上様、モンゴいか美味しゅうございました……家族から送ってもらった食べ物を一つひとつ思い出し、几帳面にお礼を述べる。美味しゅうございましたのリフレインに、私は何度読んでも涙を禁じえません。そして、もしこの遺書を、この手紙を食べたらいったいどんな味がするのだろうか、

想像するだけで体が震えます。

初江　私、手紙なんて食べられません。

講師　駄目ですか？

初江　だって、手書きの手紙なんて、書いた人の心が一字一字に込められているわけでしょ。それを食べるなんて。

講師　冒瀆？

初江　はい。

講師　これがほんとのカミへの冒瀆。しかし、心なんぞ持ち出されてもね。ではみなさんが普段平気で口にされているものには心がありませんか？　たとえば豚肉。

生徒１　ぴーちゃんね。

生徒２　しっ（黙らせる）。

講師　あれには心はありませんか？　豚の心はいいんですか？　人でなければいいんですか？

初江　それは……。

講師　ところで、黒やぎさんと白やぎさんですが、来た手紙を食べてしまうのでいつまでたっても用件が伝わらないという話ですが、どうなんでしょう。実はやぎさんは手紙を食べたときに手紙の内容を理解していた。そう思いませんか？

生徒２　では、なぜ永遠に繰り返すようなことをするんでしょう。

講師　手紙が食べたいから。

生徒１　へ？

講師　二匹のやぎさんは、手紙の内容はわかっていたのに手紙を食べたかったから繰り返した。私はそう考えます。

生徒１　なるほど。

生徒２　納得しないでよ。あの、それでは同じ手書きということで、日記というのはどうなんですか？

助手　いい質問です。日記は自分への手紙です。ボリュームといい、食材としては魅力的ですが、手紙以上に入手が困難です。

生徒１　日記をつける人、減ったしねえ。

助手　それに手紙以上に出回らない。亡くな

った方の遺品の整理をしたときに、それと知らず、古本と一緒に出してしまったなんてことでもないと、なかなか。

生徒1（初江に）　あなた、日記をつけてるんじゃない。

初江　どうして知ってるの？

生徒1　そんな気がしたの、日記顔だから。

生徒2　馬鹿！

講師　日記をおつけですか？

初江　はい。三十一年。

講師　それはいまどき珍しい。貴重ですよ。大事にしていつか……。

生徒2　食べるのね。

初江　日記といっても私のは毎日の食事の献立を書いただけです。それだけです。

講師　いいじゃないですか、毎日の食事のメニュー。すばらしい。考えただけでヨダレの垂れそうな代物です。もしも、いつか食べてもいいということになったら、ぜひともご相伴にあずかりたいものですな。

生徒1　確かにおいしそうな気がするね。

講師　さて、だいぶ話がそれてしまいました。そういうわけで高級食材はなかなか手に入らないですが、ここにいわば入門用があります。手紙というか、手引きというか。これは実に味わい深く、かつ口あたりもいい。今日はこれを使いましょう。

生徒2（配られた小冊子を手に取り）『神への導き』、だって？

生徒1　何、それ？

助手　ええ、それでですね。誤植があります。神ではなく、紙です。

生徒1　へ？

助手　ゴッドではなくペーパーです。この文章はすべて神を紙におきかえて読んでいただきたい。

生徒2　ふう……やれやれだ。

助手　どうされました？

生徒1　やれやれよね。

生徒2　前置きがずいぶん長いからくたびれ

ちゃった。この先どこまで行くかと心配していたら、やっとこさ。

助手　何のことでしょう。

生徒１　やっとこさよね。

生徒２　ずいぶん回りくどいやり方ね。まあ、最近ではみんなこの手の勧誘には警戒していてなかなかひっかからない。ペーパークラフト講座や料理教室を装ったぐらいでは、こういう展開には持ち込めない……考えたわね、紙料理とは。オカルトをうまくカムフラージュ、いえカミフラージュ。

講師　何のことですか。

生徒２　とぼけないで。

生徒１　とぼけないでよね。

助手　まるで私たちがオカルトインチキ宗教団体で、その勧誘のためにカミ料理をでっちあげてるかのような。

生徒２　図星でしょ。

生徒１　語るに落ちたわね。

助手　それはとんだいいがかり。

生徒２　ではズバリいってあげるわ。あなたたち、黒羊会でしょ。

生徒１　羊の皮をかぶった狼。

講師　あなたたちはいったい何者ですか？　よくよくみれば、いつもの生徒さんと違う。化けていたんですね。

生徒１（実は佐藤）　化けていたのはそっちじゃない。

生徒２（実は塩田）　スーパーのお総菜係のパートとは仮の姿、私たちは国家食品安全委員会、通称食安の調査官。

佐藤　食に関するすべての陰謀と破壊活動を取り締まる特別国家公務員、Ｇメンよ。

初江　あなたたち……。

佐藤（初江に）ごめんね、黙っててて。私たち、公儀隠密だから。

講師　それで？

佐藤　え？

助手　私たちの違法行為は何ですか？　紙を食べることですか？

塩田　それにかこつけた勧誘行為よ。

講師　勧誘などしていません。この入門書『紙への導き』を料理して食べてみようとはいっていますが、御誘いなどしていない。

佐藤　何、言ってるの。それを食べたら、あんたたちのあやしげな教義が頭に入っちゃうんでしょ。

講師　そうなんですか？

佐藤　あなたが言ってるんでしょ。

講師　そんなこと言いましたっけ。

塩田　（初江に）ねえ。

初江　……。

助手　証拠、ないでしょ？　違法性を証明するの、無理だと思いますよ。

そんなやりとりの間にも、初江はハサミで紙を切っている。

塩田　高木さん、何、やってるの！

初江　料理を。

佐藤　やめなさいよ。今の聞いていたでしょ。この人たち、新興宗教の。

初江　どうでもいいの。この人たちの信じる神様なんてどうでもいいけど、紙料理は信じたいの。私、信じられるの。

佐藤　何言ってんのよ！

初江　私ね、私の日記を材料に紙料理をつくってみたいの。それで……。

塩田　それで？

初江　食べてもらいたいの。

佐藤　誰に？

初江　私の家族に。そうすれば……。

講師　それはいい考えです。実は、お節介かと思ったんですが、私どもの店でつくっているのをすでにお宅にお届けしてあるんですよ。紙料理に慣れていただこうと。

初江　うちへ？

講師　はい。

暗転。

13

高木家のリビング・ダイニング。ピザを囲んでいる三人。

剛史　母さん、これを俺たちに食べさせたいの？

麗子　何かのメッセージ？

剛史　メッセージというより、こんなものが存在するってことが謎だ。

麗子　カルチャーセンターのペーパークラフト講座と関係あるのかな。

三郎　……食べてみるか。

剛史　父さん、これ、紙なんだよ。

三郎　これが母さんの謎かけなら、こたえなきゃならんだろう。

剛史　本気？

三郎　実は紙に良く似せた……（しげしげと見て）紙だな。（口に含む）うん？

剛史　食べたの？

三郎　うん。

剛史　どう？　どんな味？

三郎　紙だ、紙の味……でも食べられないこともないぞ。（剛史に残りを渡し）ほれ。

剛史　ほれって……。

三郎　紙の味なんだが、何というかその……懐かしいような。

剛史　懐かしいって、父さん、紙、食ったことあるのかよ。

三郎　ないよ。

剛史　前世が山羊か。

三郎　ほら。

剛史　俺はいいよ。そんな、味のないもの。

三郎　味はあるよ、紙の味。

剛史　紙の味ってのは、味がないことの喩えだろうが。

三郎　味が無いから嫌だっていうが、そのサプリメント、味ないだろ。サプリメントの

一種だと思って食べてみればいい。

麗子　私にも。

三郎　麗子、やってみるか。

剛史　姉貴、よせよ。

麗子、口にする。

三郎　どうだ？

麗子　……紙ね。

三郎　案外いけるだろ。

麗子　不思議な味。

三郎　そう、不思議な味だ。剛史も、ほれ。

剛史　俺、いいって。

三郎　麗子も父さんも食べたんだぞ。おまえだけってのは、どうかな。

剛史　何だよ、これ、罰ゲーム？

麗子　母さんの罰ゲームかも。

剛史　姉貴まで……。

麗子　食べてみればいいじゃない。

剛史　食い物ならチャレンジしてみるよ。でもこれ紙だぜ。

三郎　剛史、おまえは繊細すぎる。過剰反応、というか過敏だ。ぴーちゃんのことだって豚肉食えなくなったの、クラスでおまえだけだろ。父さんはおまえのそういうやさしさ、デリカシーを決して否定するもんじゃない。むしろ、平気な顔して食っている連中の方がおかしいかもしれん。でも、もうちょっと鈍感じゃないと、精神的にタフじゃないと世の中やっていけない。

剛史　ちょっとの間じゃないか。

三郎　ちょっとか？　五年だぞ。（麗子に）なあ？

麗子　三年よ。

三郎　三年間、トンカツは駄目、ハムも駄目、豚しゃぶも駄目、ポークカレーも駄目、しょうが焼きも駄目、焼き豚も駄目、角煮も駄目……母さん、豚肉なしでよくやった。

麗子　もういいじゃない。

三郎　心配してるんだ。豚肉ならまだいい。

牛肉も鶏肉もあるんだから。でもさ、これが会社の嫌な上司としよう。

剛史　父さんの喩えっていつもそうだ。会社から離れられないの。

三郎　まあ、聞け。豚肉が上司だったとする。

剛史　上司は食べないよ。

三郎　おまえが豚肉を受けつけなくなったように会社の上司を受けつけなくなる。そいつの顔もしゃべり方も仕草も、洋服のセンスも趣味も、プロ野球の贔屓のチームも好きな女優も、好物も酒癖も煙草のにおいも、支持政党も出身大学も政治信条も愛読書も故郷も、それからそいつの家族も。何もかも嫌になる。受けつけなくなる。

麗子　言ってること、極端。

三郎　豚肉だったらいい。これが人間だったらたいへんだと言いたいんだ。「僕、受けつけないんです」ではすまん。

剛史　父さん、そういう上司がいるの？

三郎　そういうことじゃなく……だから、つまり、何と言うか……逃げるな、引きこもるな。とにかく、若者よ、トライしてみろ！

剛史　食べるよ。

三郎　よーし。

剛史　父さんに言われたからじゃない。母さんが何を言いたいのか知りたいから。

剛史、口にする。

三郎　どうだ？

剛史　確かに不思議な味だ。それに懐かしい。

麗子　ねえ、こういうのはどう？　私たち、赤ん坊の頃、何でも口にもっていくでしょ。（三郎に）ねえ、そうなんでしょ？

三郎　誤飲っていってな、注意してないとともでもないものまで……ああ、そのときに。

麗子　紙を食べたんじゃない？

剛史　吐き出すよ。

麗子　吐き出すけど、味の記憶が残って。

三郎　そういや、よく新聞や雑誌をちぎって

とっちらかしてくれたもんな。ああ、そのときロに入れたんだ。

チャイム。

麗子　帰ってきたわよ。

麗子、玄関へ。

剛史　これはさ、ファーストフードじゃないか。ということは、きちんとしたディナーもあるってことかな。

三郎　宅配ピザがあるんだから、レストランもあるかもな。

剛史　紙の料理のレストランか……。

麗子、戻ってくる。

麗子　お父さん。

三郎　母さんは？

麗子　お客さん。

三郎　客？

麗子　父さんの。

三郎、玄関へ。

剛史　客って？

麗子　……。

三郎の声と女の声が聞こえてくる。

三郎の声　ど、どうしちゃったの。

裕子の声　だって、高木さんの会社へ電話したら、本社へ戻ったって。ひどーい、裕子に全然内緒で。

三郎の声　でも、どうしてここが？

裕子の声　ほら一度、一緒に来た北村って髪の毛の薄い人に教えてもらったの。

三郎の声　あいつ！

裕子の声　あいつじゃないでしょ。高木さん

が悪いんでしょ……あがっていい？

三郎の声　いや、その。ちょっと裕子ちゃん。

剛史　客って、あの大飯ぐらいのキャパ嬢？

麗子　しっ。

緒方裕子（二四歳）、入ってくる。

裕子　あ、こんにちは。緒方裕子です。私、福岡で高木さんに……。

麗子　うかがってます。こちらこそ父がいろいろとお世話になったみたいで。

裕子　お嬢さんですよね、過食症の。

麗子、三郎を睨む。

裕子　裕子と高木さん、そういう関係じゃないんです。エッチどころか、手も握っていないんです。裕子のおなかがお世話になっているんです。

剛史　ほんとに食べるんですか、一度に塩カルビを二十人前も？

裕子　二十五人前です。

剛史　（つぶやく）これがほんとの肉欲だ。

麗子　小さい頃から、そんなに？

裕子　子供の頃は普通でした。すごく食べ出したのは高校生になった頃から。

麗子　あなたも過食症でしょ？

裕子　そうじゃないって言われました。

麗子　食が過ぎてるじゃない。異常に。

裕子　過食症でなくて巨食症だそうです。

麗子　拒食症？　違うでしょ。

裕子　巨食の巨は巨人の星の巨です。

剛史　巨人の星、知ってるんだ。

裕子　食べても全然太らないし。体重、高校の頃から変ってません。

麗子　……。

裕子　血糖値とかコレステロール、それから何だっけ……ええと、ああ、中性脂肪も普通です。たくさん食べたことで自分が嫌になったこともないです。吐いたことなんて

一度も……ごめんなさい。

麗子　いいわよ、別に。

裕子　困るのは食費がめちゃめちゃかかることです。普段は二十代の女の子が食べる量の倍くらいに抑えているんですが。

剛史　抑えて……。

裕子　週に一度か二度、我慢がきかないくらい食べたくなるんです。猛烈な食欲が襲ってくるの。これがもし性欲の方だったら、裕子、きっとど淫乱女だと思います。

麗子　それで、あなたの胃袋の大暴走を静めるためのお財布が必要だと。それがうちの馬鹿親父ということなんだ。

三郎　馬鹿親父……。

麗子　馬鹿でしょ。（裕子に）あなたもあなたね。それだけ尽くしてもらって、胃袋にエクスタシーを感じさせてもらったのなら、一度や二度くらいやらせなさいよ。それが人の道ってもんよ。あなた、それでも女？

剛史　やらせなさいって……。

裕子　私はいつでもオッケーだったんです。でも高木さん、そういうのはいいっていうからつい甘えて。でも、やっぱ、女として最低ですね。

三郎　いいんだって。

剛史　父さん、もうだめなの？

三郎　そういうわけじゃ……。

麗子　それで、福岡からわざわざおいでになったのは？

裕子　高木さんとちゃんとお別れもしてないし、それに例の猛烈なのもやってきたし。

麗子　交通費の方が高いでしょうに。

裕子　お客さんに長距離便のドライバーがいるんで、築地まで乗せてもらって。

麗子　もしかして築地市場？

裕子　氷詰めのお魚と一緒に。

麗子　……。

剛史　あの、緒方さん。

裕子　裕子でいいです。

剛史　おなか減ってるんですか？

裕子　はい、かなり。
剛史　このうち、今日は何もないんです。これ以外は。
裕子　ピザ？　大好きです！
三郎　Ｌサイズ、十枚は軽いもんな。
剛史　でもこれ、ちょっと特別なやつだから。
裕子　ペーパーウォーム？　聞いたことないですね。
剛史　これ、紙なんです。
裕子　え？
剛史　紙。
裕子　紙？
剛史　ほら。
裕子　うそ……ほんとだ。これを、まさか、食べるんですか。
三郎　我々も今日初めて食べた。どうかなと思ったんだけど、案外いける。
裕子　東京で流行ってるんですか？
剛史　流行ってるかどうかは知らないが、こういう店があるんだから、我々以外にも食べる人がいるんでしょ。
裕子　どんな味？
麗子　不思議な味。
裕子　紙か……。
三郎　裕子ちゃん、外でご馳走するよ。わざわざ東京まで来てくれたんだし。お寿司がいい？　それともうなぎ？
裕子　裕子、これ食べます。
三郎　おなかにたまらないと思うよ。いや、嵩張るかな。とにかくそんなにガンガン食べるものじゃなさそうだし。それにこれは母さんのサプライズというか。
裕子　奥さんの？
三郎　女房が注文したらしくて。
裕子　食べてみます。裕子、大食らいだけど、好き嫌いないし。

裕子、口に入れる。

三郎　どう？

裕子　……うん。

三郎　やっぱ焼肉にしようか。せっかく東京まで来てくれたんだから。剛史、東京で有名な焼肉店っていうとどこだ？

三郎　叙々苑とか。でも彼女、質より量なんだろ。だったら、チェーン店でもっと安いところが。

裕子　いける。これ、結構いける！

裕子、さらに食べる。

三郎　ちょっと、裕子ちゃん。

裕子　あ、ごめんなさい。みなさんの分もあるんですよね。

剛史　いや、いいですよ。

麗子　どうぞ、気にいったのなら平らげてくれても。

裕子　じゃ、遠慮なしにいただきます。

三郎　裕子ちゃん。

裕子、ひたすら食う。見事な食いっぷり。三人、感心して見ている。

剛史　すげえ！

麗子　のど、つまらないかしら。

途端にむせる裕子。水を持ちにいく三郎。裕子、飲む。落ち着く。

剛史　母さん、帰ってきたらまずくないか、こういう状況。

麗子　うん。

チャイム。

麗子　今度こそ、母さんだ。

麗子、玄関へ。すぐ戻る。食安Gメンの塩田、佐藤も一緒。

塩田　お邪魔します。
佐藤　お邪魔っ。
三郎　どちらさま？
塩田　スーパーでは高木初江さんの同僚。
佐藤　たわいのないおしゃべり仲間。
剛史　母のお友だちですか？
塩田　ですが、その正体は国家食品安全委員会のGメン。
佐藤　略して食安、公儀隠密です。
三郎　その隠密さんが、うちにどのような用向きで。
塩田　（裕子を指して）食べちゃいましたね。
裕子　……食べちゃいました。
佐藤　（三郎に）例の過食症の娘さん？
麗子　それは私です。その人は父の……愛人というか。
佐藤　あらら、修羅場だったのね。
三郎　違いますって。
塩田　愛人か何か知らないけど、これ食べたの、この人だけ？
三郎　我々も一口、二口。
塩田　その程度なら大丈夫。おそらく。
佐藤　じゃあ、この人がほとんど？
剛史　やせてるけど、驚異的な大食らいなんです。特殊な胃袋の持ち主で。
佐藤　あ、あなた、高木さんの息子さんね。ぴーちゃんっていう。
剛史　ぴーちゃんじゃないです。剛史です。あの、これ、毒かなんか入ってるんですか、それとも病原菌？　０―１５７とか。
塩田　わからないの。
佐藤　はっきりしたことは。
剛史　だって保健所の人でしょ。
佐藤　保健所じゃないっ！
塩田　はっきりしてるのは、お母さんの名を騙って某オカルト宗教団体が、ご家族にこれを食べさせようとしたってこと。
麗子　カルチャーセンターと関係あるんですか？
佐藤　大有りです。そこの講師がその団体、

黒羊会のメンバーなのです。

三郎　こくようかい？

佐藤　黒い羊の会。

剛史　どういう組織なんですか？

塩田　くわしいことはわかっていません。ただ、勧誘の際、紙を食べさせるのです。紙料理と称して。その紙の中に彼らの教義を印刷したものを混ぜます。そうして徐々に洗脳していこうという計画らしいですが。

三郎　紙を食べたら、洗脳されるんですか？

塩田　わかりません。人体実験するわけにはいかないし。ですが、少なくも黒羊会の連中はそう信じているわけです。（裕子に）あなた、どうですか？

三郎　裕子ちゃん、おなか、変じゃない？

佐藤　おなかに変調はないでしょう。あるとしたらおつむです。脳です。

三郎　裕子ちゃん、頭の中、どう？　仏様の姿とか、曼荼羅とか浮かんでこない？

裕子　ピザの中に何か入っていたわけ？　裕子、どうなっちゃうわけ？

佐藤　もしかすると、その宗教の信者になっちゃうわけ。

裕子　死んじゃうの？

佐藤　信者！

裕子　高木さん、裕子、死んじゃうんだって。

三郎　大丈夫だよ、死んだりしないよ。

裕子　どうせ死ぬんなら、その前に焼肉死ぬほど食べたい。

三郎　わかった、うなぎも寿司もつける。

塩田　この娘の頭の程度なら、あまり影響ないんじゃないの。

佐藤　一遍死んだ方がいいみたい。

裕子、急に苦しみだす。

三郎　おい、裕子ちゃん！

麗子　吐かせた方がいいわよ。

裕子、目をむきながら。

裕子　……信仰は心の食事。

剛史　おい、何だか雰囲気、変ったよ。

三郎　裕子ちゃん！

裕子　紙を食べるとはすなわち、神を食べる。神を体に取り込むことに他ならぬ。神人共食とは、神と人間が共に食事を摂ることにあらず。神が人間を食い、人間が神を食うこと。すなわち共食いのこと。紙を食べて神を食べる。同時に人は神になるなり。

裕子、卒倒。

三郎　裕子ちゃん！

佐藤　何だかおかしなこと言ってたわね。

塩田　黒羊会の教義じゃないの。

いつの間にか講師と助手が現れる。

講師　信仰は心の食事です。

佐藤　出たな、オカルト。

助手　（裕子に）こちらが、高木初江さんのお嬢さんですね？

佐藤　違うわよ。この子は旦那の愛人よ。

助手　え？　娘さんじゃないの。

塩田　あなたたち、この一家を洗脳しようとしたのね。

講師　正解。何といっても家族です。家族単位、家族全員が信仰すればこれは大きな力になる。家族は強力です。なんせ核家族っていうくらい。すさまじい威力。

佐藤　その目論見は失敗したわね。

講師　この際、愛人もまじえた家族という変則パターンで。

三郎　愛人じゃない！　どうやって解くんだ、このマインドコントロールは！

助手　解けることはない。洗脳とは脳を洗うだが、この場合は染める脳と書いて染脳。我らが尊い教義を印刷した特殊なインクが脳を染めていく。

塩田　何よ、そのインクって。大豆か？

助手　違う。教祖の血と汗と涙、その他もろもろを混ぜたもの。詳しくは企業秘密。

佐藤　何だか汚そう。

講師　汚いとは何だ。

塩田　調べたわよ、あんたたちの宗教、羊の皮がご神体なんでしょ。

講師　三千年も前のありがたい羊皮紙だぞ。

佐藤　どこまでも紙にこだわるのね。

塩田　何が書いてあるのよ。

助手　信者になれば教えてもらえます。

剛史　あ、気づいた！

裕子、正気に戻って。

裕子　急にくらくらしちゃって。二日酔いみたいな気分。

三郎　大丈夫？

裕子　だいじょう、ヴィッ。

剛史　元に戻ったみたい。

三郎　裕子ちゃん。

裕子　高木さん、裕子、夢見ていたの。

三郎　夢？

裕子　羊さんが大勢いて、裕子が数えているの。羊が一匹、羊が二匹……。

助手　何なんだ、こいつは！

講師　馬と鹿だ。羊じゃなく。

佐藤　あらら。

塩田　洗脳の効果、たいしたことないみたい。

剛史　この人、特異体質で、あまり吸収しないんですよ。

助手　子のたまわく。

講師　三十六計逃げるにしかず。

講師と助手、逃げ出す。

佐藤　ちょっと待て！

塩田　追いかけるわよ！

後を追う食安Ｇメン。

剛史　何だよ、今のは。
麗子　もしかして危ないとこだったの？
三郎　裕子ちゃん、大丈夫？
裕子　大丈夫。でもおなか減っちゃった。
剛史　まだ食べられるの！
三郎　じゃあ、外へ食べに行こう。おまえたちも一緒に行かないか。母さん、すぐには帰ってきそうにないし。
麗子　私は結構。
剛史　俺も。
三郎　そうか……じゃあ、裕子ちゃん。
裕子　高木さん、何ご馳走してくれるの？
三郎　焼肉か、やっぱり。
裕子　お寿司もいいなあ。
三郎　じゃあ、あんまり高くないところで。
裕子　回転寿司でいいですよ。

三郎、裕子、退場。

剛史　回転寿司でいいですよ、か。百皿ぐらい食うのかな……姉貴、どこいくの？
麗子　ロールケーキ食べる。それから吐くわ。
剛史　姉さん、姉さんの過食症も母さんの。
麗子　怖かったの……それに私、いつか母さんみたいになるんじゃないかって。ううん、きっとなる……きっと。

麗子、退場。途中卓袱台に足をぶつける。

麗子　痛っ！

剛史の腕時計のアラームが鳴る。

剛史　ＤＨＡの時間だ。

剛史、「どこさ、どこさへきさ……」とつぶやきながらコップを持って退場。暗くなるのと同時に巨大冷蔵庫が唸り出す。扉が開く。明りが漏れる。

中から出てくる初江。スポット。

初江　役者は舞台で死ねたら本望だそうだけど、母さんは台所で死ねたら本望だって思ってた。いつか台所で包丁をにぎったまま倒れている母さんをあなたたちは見つけるの。まな板には刻みかけの野菜がそのまま、お鍋のお湯が沸騰している。幸せそうな母さんの死に顔を見ながら、あなたたちはこう言うの。「今日の夕飯、何だったろうね」……ずっと日記を読み返していたわ。三十一年、ずいぶん長いことやってきたんだなあって。我ながら感心しちゃう。母さん、頑張ったでしょ。どんなに具合が悪くても、やめたいなんて思ったことない。好きだったの。母さん、誇りを持ってた……そうじゃない。母さん、これしかなかったの。料理をつくることやめたら、何にもないの。空っぽなの……母さんの献立は、母さんからあなたたちへの手紙。送り続けた片思いの恋文……喜んでくれてると思ってた。ずっと変らないと思ってた。でもそうじゃなかった。みんな変わっていったよね。麗子はロールケーキを何本も食べてトイレで吐くようになった。「母さん見てるとムカつくの。私、母さんみたいになりたくないの」って……剛史はぴーちゃんのせいで豚肉が食べられなくなって中学の三年間引きこもった。母さん、辛くなんてなかったの。剛史の昼ごはんを考えるの、楽しかった。でも大学生になったら家で全然食べなくなった……父さんは、父さんは赴任先で若い女の人にいっぱい食べさせて喜んでるし……でもね、父さん、もうじき帰ってくるんだって。電話があったの。だから子供たちも帰ってきて……だって、だって家族なんだもの。

冷蔵庫から取り出す紙料理の皿。

初江　母さんね、カルチャースクールで習ったの。紙料理。そう、紙なの。紙を食べるのよ。驚いた？　ううん、母さん、大真面目……これはね、母さんの最後の賭け。望みをかなえる魔法。みんなをもう一度、母さんの食卓に呼び戻すために三十一年分の日記を切り刻んでつくった紙のディナーです。三万三千三百三十四食目の初江シェフがつくったとびきりのメニュー……あなたたちはきっというわ。懐かしい味。そう、懐かしい味だねって……母さんの献立は、あなたたちへの恋文。一字一字、心を込めた手紙。いつか返事がくるとしたら、そこにはこんな風に書いてあるのかしら……母さん、ロールキャベツ、美味しゅうございました。

麗子（初江の最後の台詞に重ねて）　母さん、ロールキャベツ、美味しゅうございました。

剛史　母さん　オムレツ、美味しゅうございました。

三郎　母さん、鶏の唐揚げ、美味しゅうございました。

いつのまに卓袱台の傍らに麗子、剛史、三郎が正座している。

麗子　茄子の四川風炒め、美味しゅうございました。

剛史　ピーマンの肉詰め、美味しゅうございました。

三郎　きんぴら、美味しゅうございました。

紙料理の皿をもったまま、ゆっくり卓袱台に近づく初江。

麗子　小あじの南蛮づけ、美味しゅうございました。

剛史　餃子、美味しゅうございました。

三郎　里芋と切干大根の煮物、美味しゅうございました。

麗子　海の幸のグラタン、美味しゅうございました。

剛史　ちらしずし、美味しゅうございました。

三郎　ぶり大根、美味しゅうございました。

卓袱台の上にのぼる初江。

麗子　酢豚、美味しゅうございました。

剛史　蟹コロッケ、美味しゅうございました。

三郎　鯖の味噌煮、美味しゅうございました。

麗子　帆立ごはん、美味しゅうございました。

剛史　ビーフシチュー、美味しゅうございました。

三郎　茶碗蒸し、美味しゅうございました。

紙料理の皿を高々と掲げる初江。

初江　たくさん食べて、元気を出して！

麗子・剛史・三郎（一斉に）母さん、美味しゅうございました。わたしたちは……。

初江　みんな、お帰り。

微笑む、初江。皿の中身ぶちまける、とそれは大量の紙吹雪。舞う。

了

●**引用**〈童話『山羊のレストランの新メニュー』作・酒井薫〉
〈円谷幸吉氏の遺書より〉